

豊岡市

南構遺跡・南構古墳群

—一般国道483号北近畿豊岡自動車道日高豊岡南道路に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

第二分冊 本文(二)



令和5（2023）年3月

兵庫県教育委員会

豊岡市

みなみ がまえ い せき みなみ がまえ こ ふん ぐん
南構遺跡・南構古墳群

-一般国道483号北近畿豊岡自動車道日高豊岡南道路に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-

令和5(2023)年3月

兵庫県教育委員会

目 次

第4章 南構古墳群の調査	
第1節 概 要	378
第2節 南構1号墳	381
第3節 南構2号墳	414
第4節 南構3号墳	425
第5節 南構4号墳	436
第6節 南構5号墳	441
第7節 南構6号墳	448
第8節 南構7号墳	456
第9節 南構8号墳	470
第10節 南構9号墳	477
第11節 南構10号墳	481
第12節 南構11号墳	496
第13節 小 結	502
第5章 分析・鑑定	
第1節 土師器付着物の材質分析	507
第2節 南構遺跡出土の漆塗土器の塗膜分析	513
第3節 南構遺跡出土の須恵器蓋の内面に付着する赤色顔料の分析	517
第4節 南構遺跡出土ガラス製玉の螢光X線分析	520
第5節 南構遺跡出土碧玉、切子玉石材の原石、遺物群同定	527
第6節 南構古墳群出土玉類の材質分析	554
第7節 南構古墳群の石室石材の岩石同定	559
第8節 土器付着の赤色顔料の螢光X線分析	573
第9節 南構古墳群出土鉄製品に見られる開錫殻について	576
第6章 遺物のまとめ	
第1節 概 要	583
第2節 土 器	584
第3節 金 属 製 品	653
第4節 玉 類	666
第5節 土 製 品	675
第6節 石 器・石 製 品	677
第7章 遺構のまとめ	
第1節 南構遺跡	679
第2節 南構古墳群	735
第8章 総 括	
第1節 南構遺跡と南構古墳群	765
第2節 南構遺跡と周辺遺跡	772
第3節 ま と め	781
索引	
報告書抄録	

第4章 南構古墳群の調査

第1節 概 要

調査では計14基の石室を検出した(第353図)。これらの石室については墳丘を伴う埋葬施設と考えられるが、これを明らかにすることはできなかった。これは墳丘の大半が削平されていたことに起因するものである。さらに、黒ボク層を掘り下げての検出であったため、墳裾を明確にできなかったことも一因である。

しかし、検出した石室相互の位置関係から墳丘を復元することができる状況であった。また、石室の周辺の遺構が希薄で、石室を中心とした円形状の範囲が空白地帯となっていた。これは後述するように(第8章第1節)、墳丘が後世まで意識されていたことによるものと考えられる。そしてこの空白地帯が当初の墳丘を示すものと判断している。このなかで南構7号墳・同8号墳・同9号墳については、石室の一部が調査区の裏面にかかっていることから、この断面において墳丘の一部を復元することが可能であった。



第353図 南構古墳群

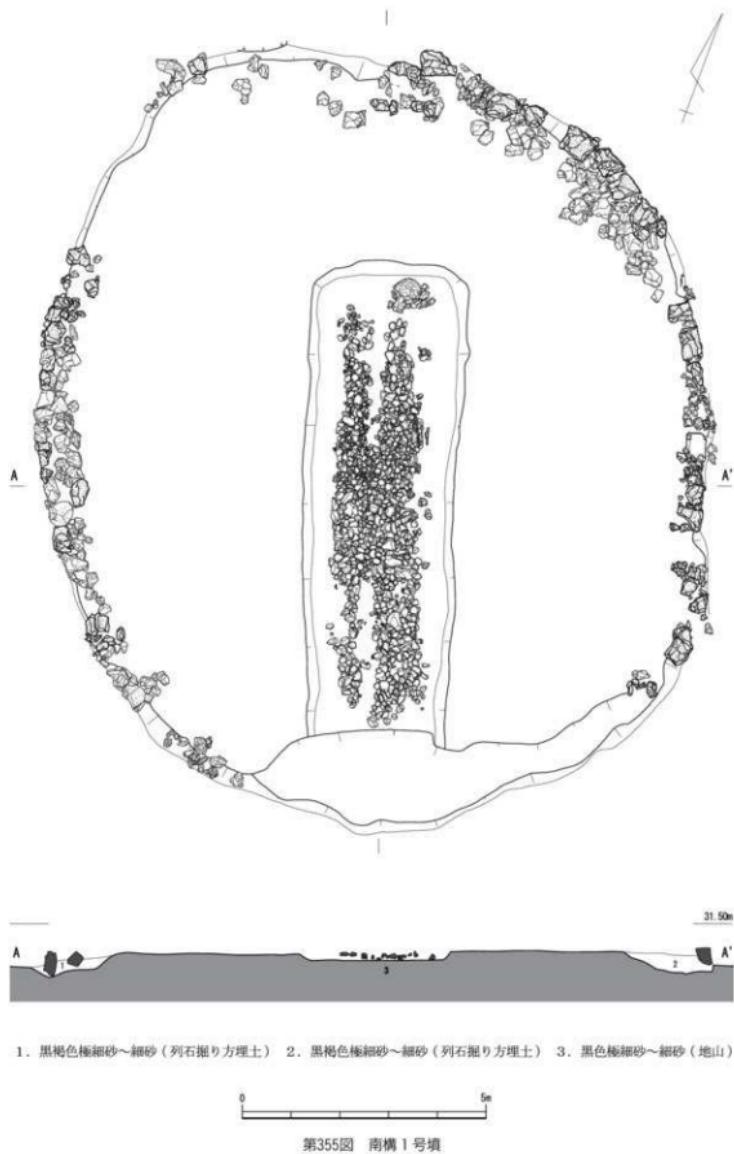
以上をもとに復元したのが第353図である。復元の結果、南構1号墳～南構11号墳の11基の古墳を復元することができた。なおこの復元にあたっては、南構3号墳と同10号墳については、埋葬施設が近接するため、複数の石室からなる古墳と考えている。具体的には、同3号墳は2基の、同10号墳は3基の石室を有するものと考えている。ただし、復元された墳丘の規模については精度を欠くものであることをことわっておきたい。

上記の復元によると、南構古墳群は調査地の北部に位置する(第354図)。南北方向については、70mの範囲に分布が限られる。東西方向については100mの範囲にわたって明らかとなっている。ただし、東西方向の範囲については、より拡がる可能性が考えられる。さらに北地区と南地区を隔てる現道下にも埋没している可能性も否定できない。

なお以下の記述にあたっては、記述の簡略化のため古墳名の「南構」を省略することもある点を断つておきたい。また時期については第6章第2節の検討結果に基づくものである。



第354図 南構古墳群俯瞰



第355図 南構 I 号墳

31.5m



第2節 南構1号墳

(図版89~96 写真図版202~244 附表90~92・104・105・109)

1. 検出状況

北地区のほぼ中央部で検出した(第353図)。南構2号墳の南東側、同3号墳の北西側に近接して位置する。調査地の盛土・旧耕作土層を取り除いた現地表面下90cm、旧耕作土層から40cmの深さで礫床が検出されている(第356図)。のことから、後世の耕作において墳丘・石室の大半が削平・破壊されたものと考えられる。

一方墳丘裾部において外護列石が残存し、列石上面以下の墳丘が残存していた。そして列石上面のレベルが先の礫床と同レベルであることから、結果的に礫床レベル以下の墳丘が残存していたことになる。本墳は平面的に墳丘を伴って検出できた唯一の古墳である。平面的には完存する(第355図)。ただし墳丘南側については斜面が削られ、列石も残存していなかった。

この他、前庭部においては土器・金属製品等が散乱した状態で出土しており、当墳に係わる遺物と考えている。

2. 墳丘

盛土 検出した範囲では盛土を確認することはできなかった。少なくとも礫床レベルまでは、基本的に地山からなっていた。ただし、列石の据え付けにあたっては、その控えを中心に盛土が認められた(第355図)。

規模 平面形は基本的には円形をなす。ただし、墳丘主軸方向(南北方向)における裾部間の距離は15.60m、その直交方向で13.70mと、南北方向にやや長い橢円形傾向にある。

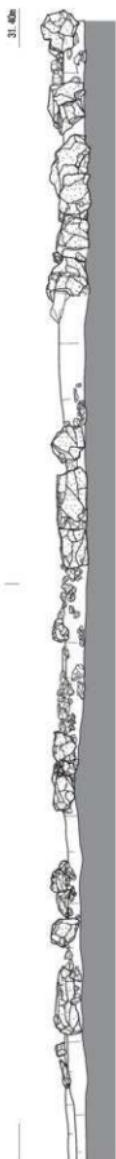
墳丘中央部の標高は30.90mを測る。墳丘裾部の標高は、主軸ライン上北端部で30.50m、その直交ライン上西端部で30.65m、東端部で30.55mと、ほぼ一定している。よってそれぞれの箇所での墳頂部との比高は、40cm・25cm・35cmとなる。



第356図 南構1号墳の調査



第357図 東側外護列石平面図



第358図 東側外護列石立面図

外護列石 石室南側を除く箇所で検出されている。検出された列石はいずれも1段からなり、明確に積み上げられた箇所は認められなかった。特に、埴丘西側(第360図)と東側から北側(第361図)にかけ良好な状態で検出されている。逆に北西部においては、残存していたのは一部に限られる。残存していた列石についても、原位置が保たれているのか疑問のつく箇所も少なからず認められた。さらに南側において列石は全く残存していなかった。このため石室と外護列石との関係を明らかにすることはできない。

列石は埴堀部のラインに沿うように設置されていた。埴丘の断ち割り調査の結果、列石と埴丘の関係について、列石の高さに相当する厚みをもった盛土とともに列石が置かれている様子を観察することができた(第355図)。列石に用いられた石材は、全て基盤層中に含まれる溶岩である。ただし、後述するように列石の多くが面を有することから、ある程度の石材の選定がなされたものと考えられる。明確な加工痕は認められなかったが、一部加工も行われていたものと考えられる。

西側においては、特にその中央部が最も良好に残存していた。埴丘堀部とその内側に、二重に礫(溶岩)が置かれていた。堀部を形成する礫は面を有する石材が用いられ、面が埴丘の外側へ向くように並べられていた(第358図)。

礫の大きさは40cm大が平均的で、最大で50cm大のものも認められる。列石は埴堀部からの高さが30cmになるように揃えられていた。内側の石材は、控えとして並べられたものと考えられ、外側よりやや小型のものが目立つ傾向にある。さらに面を有する石材は認められない。数か所において礫が抜けている箇所が認められ、控えの礫のみしか遺存していない箇所が多く認められた(第357図・第358図)。

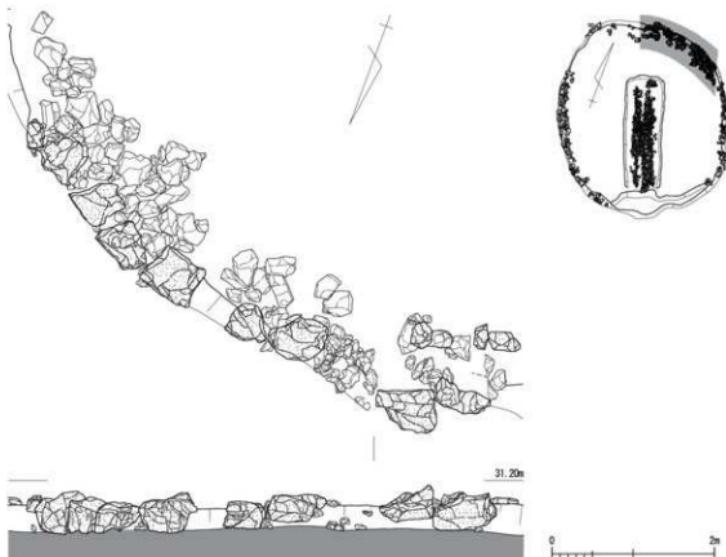
このなかで、北東部が比較的良好に残存していた(第357図)。この箇所で認められた用材法は西側と基本的に同じである。ただし礫の規模については60cm大のものが少なからず認められ、全体的に西側より大型の石材が用いられている。これにともない、埴堀部からの高さも35cm~40cmとやや高い傾向が認められた。



第359図 列石実測作業



第360図 西側外護石平面図・立面図



第361図 北東側外護列石平面図・立面図

3. 石室

概要 墳丘中央部南側で検出されている。石室南側が墳丘南辺付近まで残存していることから、南側に開口部があったものと考えられる。

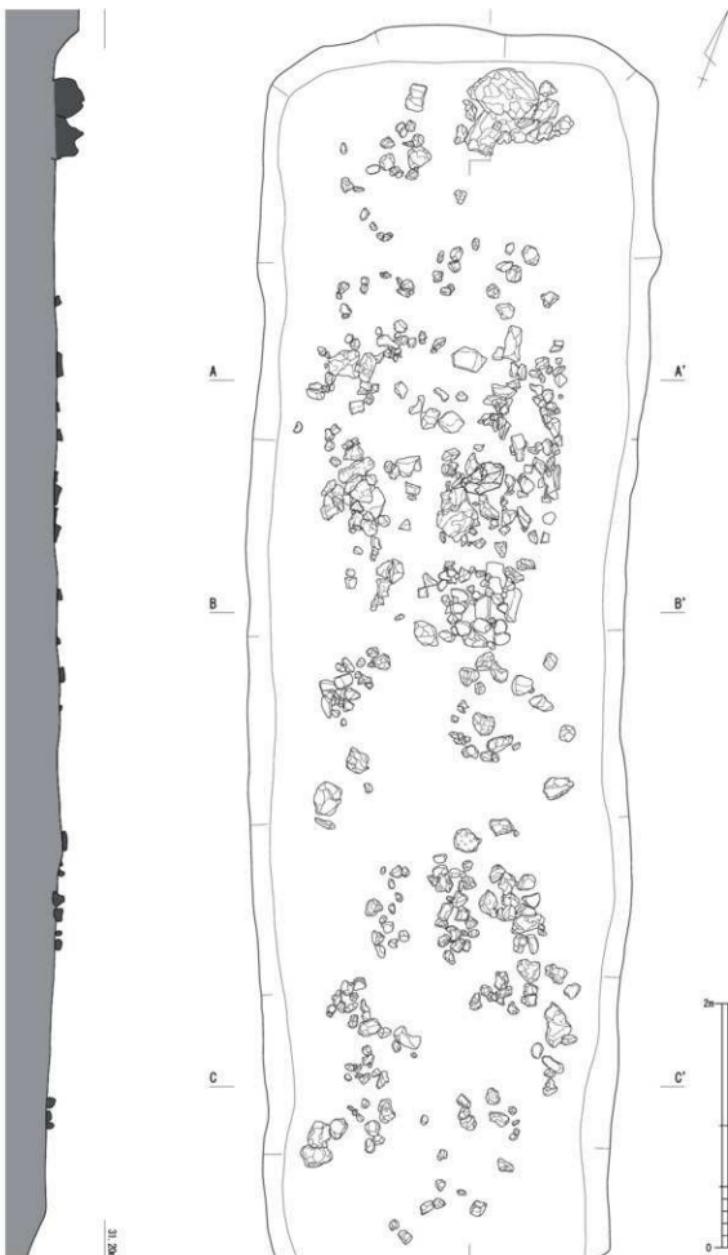
石室内において残存していたのは墓壙と床面(蹠床)のみである。床面については3面認められたことから、追葬が行われていたものと考えられる。

墓壙 平面形は長方形をなすが、南辺については削平を受け残存していない。築造当初に南辺があつたかどうかについても検証しえない状況である。検出面における墓壙の規模は、南北方向を主軸とし10.20m残存する。その直交方向では3.10mを測る。墓壙横断面・縦断面は逆台形をなし、底部は平坦面をなす。中央部における検出面からの深さは20cmである。

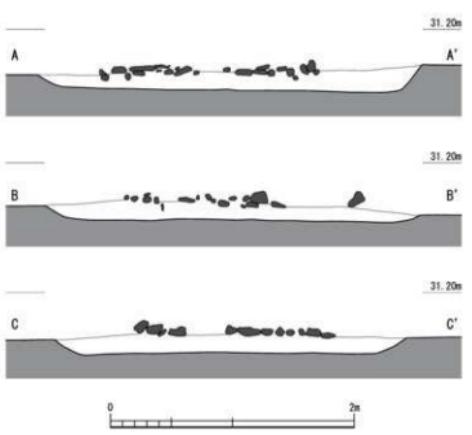
床面 初葬面と追葬面2面(第1次追葬面・第2次追葬面)の計3面にわたり検出されている。

初葬面(第362図) 溶岩が散在した状態で検出されている。当該面で副葬されたと考えられる遺物が出土していること、溶岩の規模がほぼ同じであること、掘り方内に溶岩が集中しその範囲が後述する第1次追葬面・第2次追葬面とほぼ一致すること、などの点から埋葬面と判断したものである。

追葬面 第1次・第2次ともに河原石を敷き並べた蹠床からなるものである。第1次追葬時に副葬された土器の上に礫が並べられていたことから(写真図版212)、この面を手掛けりとして両面の峻別を行った。第1次追葬面と第2次追葬面の範囲は基本的に同じで、南側の大半は第1次追葬面と第2次追葬面のレベル差は認められなかった。また掘り方内全面に敷かれるではなく、掘り方西辺・東辺から60cm、北辺から1.20mの範囲には認められなかった。この他残存する掘り方南端部から60cmの範囲におい



第362図 初葬面平面図



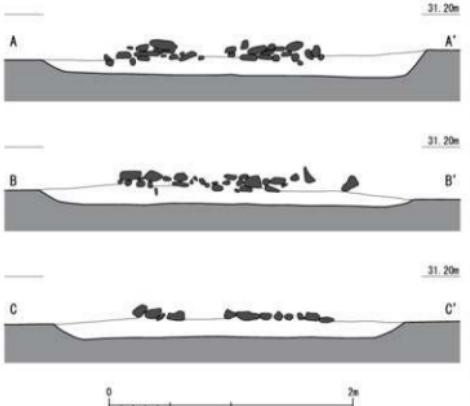
第363図 初葬面横断図

(第367図)。これらの礫は隙間のないよう敷き詰められ、その上面は平坦面をなしていた(第364図・第369図)。その標高は南側で30.95m、北側で31.00mとほぼ水平である。

第2次追葬面(第366図) 河原石が初葬面上に敷き詰められていた。使用された礫は扁平などを基本としているが、やや扁平ではない礫も目立つ。使用された礫は第1次追葬時と同様河原石が基本で、一部溶岩が認められた(第367図)。ただし、その規模は10cm~15cm大とやや小振りな礫が多く認められる。その範囲は礫床中央部から北側に限られ、南側では認められない。当面においても、その上面が平坦面をなすように敷き詰められていた。その標高は南側で31.00m、北側で31.05mとほぼ水平である。

上記の礫床については、①礫床全体が南側にかたより墓道の余地がないこと、②礫床分布において南西部の1/3の幅が狭くなっていることから渓道の可能性が考えられることが、③第2次追葬時の礫の置かれた範囲が上記渓道部と考えられる範囲よりも北側に限られることから、横穴式石室であったと考えられる。特に②から西側に袖をもつ片袖式であったと復元することができる(第368図)。

以上から復元される石室規模は、玄室が主軸方向で5.50m、その直方向で1.90mである。渓道部は、幅が1.60m、長さ3.00mと復元できる。袖幅は30cmと復元でき、石室主軸方向はN19° 00' Wを示している。玄室床面積は10.45m²である。

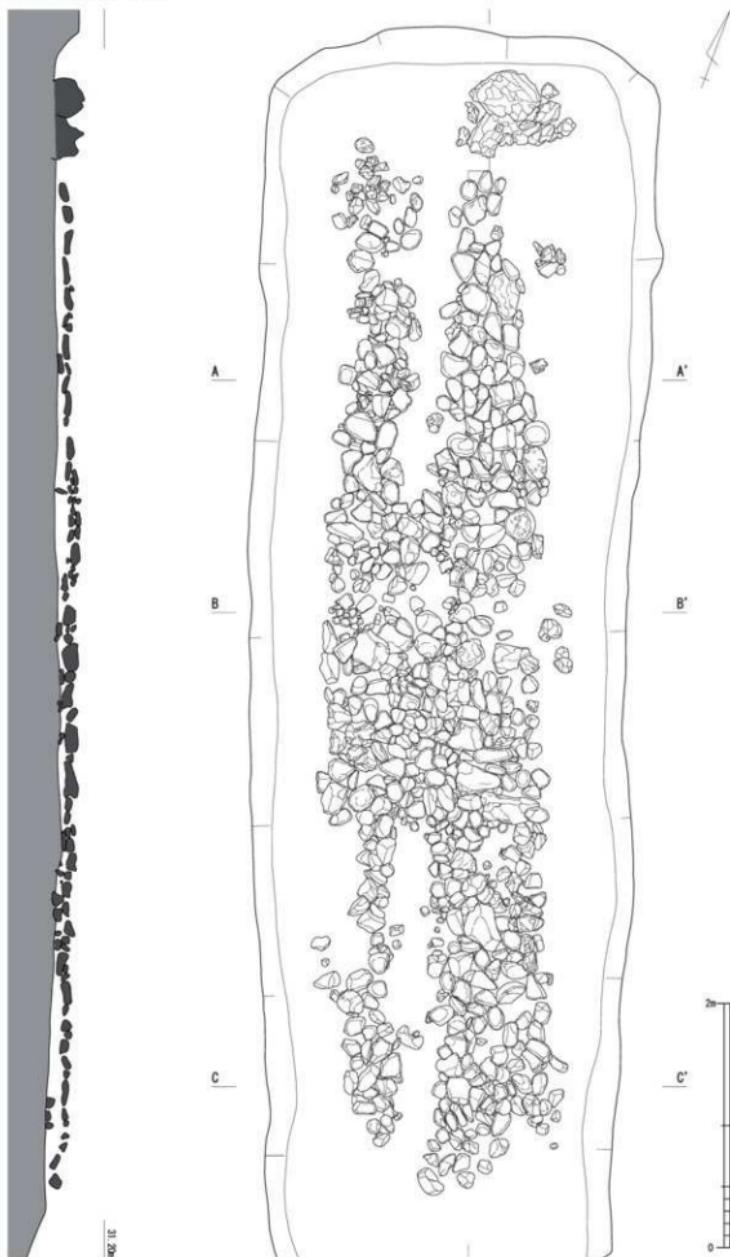


第364図 追葬面横断図

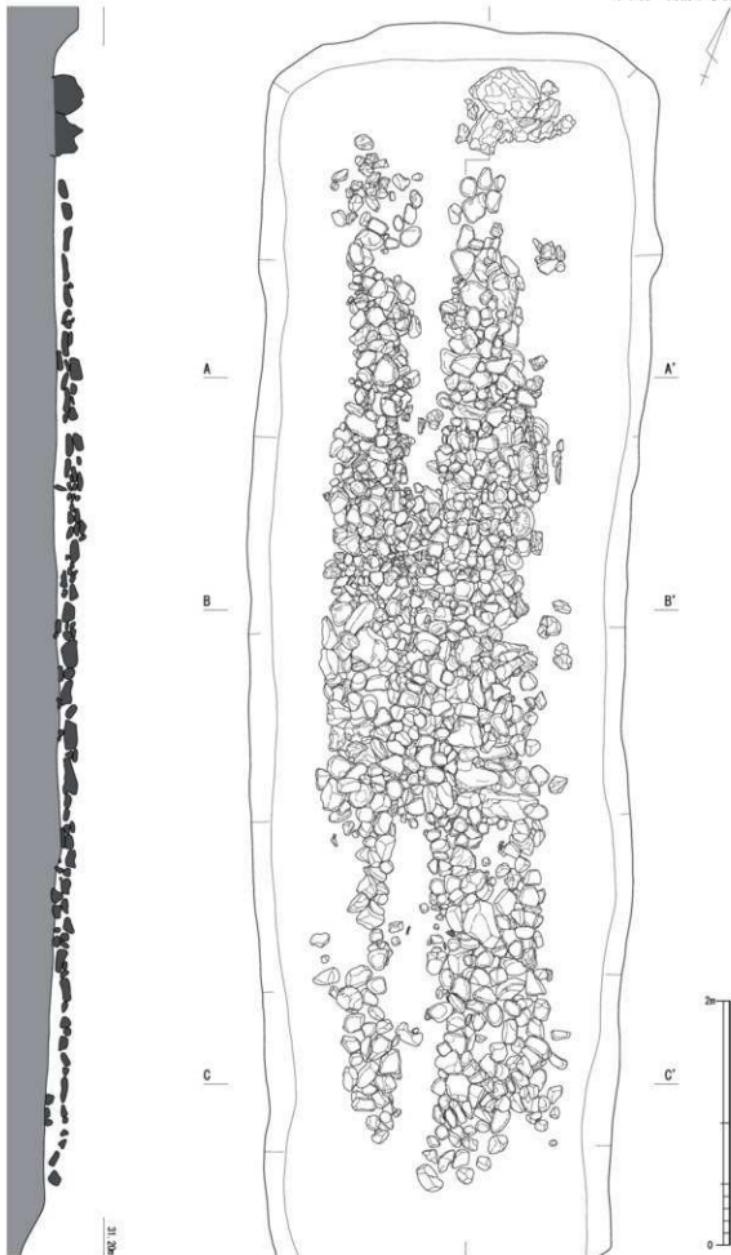
ても、礫は認められなかった。この礫の認められなかった範囲に石室が構築されていたものと考えられる。掘り方内北東部に認められた溶岩は、この一部の可能性が考えられる。

礫床が検出された範囲は、主軸方向で8.40m、その直交方向で1.75mである。ただし南側1/3と北側1/3の範囲においては、主軸ライン上を中心に一部礫が認められなかった。

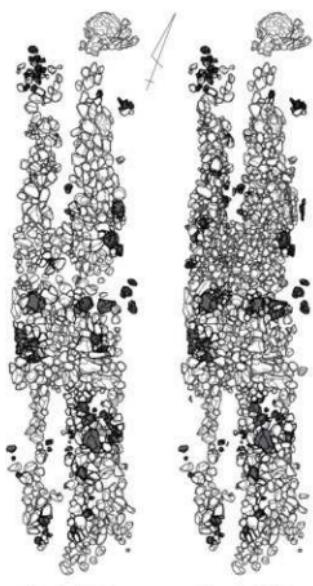
第1次追葬面(第365図) 15cm~20cm大の比較的扁平な石が敷き詰められていた。一部の礫には30cm大のものも認められた。礫は河原石を基とするが、一部溶岩も認められた



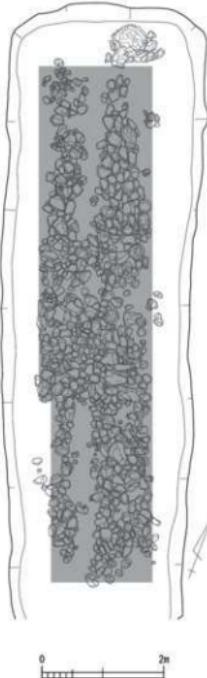
第365図 第1次追葬面平面図



第366図 第2次追葬面平面図



第367図 碓床の石材



第368図 石室の復元

4. 石室内出土遺物(図版89~91 写真図版225~228・237~243 附表90・91・104・109)

初葬面・第1次追葬面・第2次追葬面の各面から遺物が出土している。

初葬面(第370図) 須恵器・金属製品・玉類が出土している。その出土位置は、石室南半部に集中し、須恵器がその場で押し潰された状態で出土している(第371図)。多くの須恵器が側壁に沿うような位置で出土していることから、追葬時に寄せられた状況を示しているものと考えられる。このため杯身と杯蓋がセット関係にある位置で出土していない。

玉類は勾玉が1点(J1)、玄室のはば中央部から出土している。

須恵器 杯蓋・杯・高杯・甌・壺の各器種が出土している。

杯蓋 6点(2025~2030)出土している。2025と2026が杯蓋kに、2027が杯蓋qに、2028が杯蓋Y2に、2029が杯蓋sに、2030が杯蓋Y4に分類される。

2025は全体的に器壁が厚く仕上げられている。天井部1/2はヘラ切り後未調整である。また、天井部外面には焼成時に釉着した破片の付着が認められる。2026は天井部1/2がヘラ切り後未調整である。最後に天井部内面がナデにより仕上げられている。天井部と口縁部境外面は、強い回転ナデにより凹線と

なっている。2027はほぼ完存する個体である。天井部はヘラ切り後未調整で、他は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

2028も2027と同様の特徴が認められるが、最後に天井部内面に粗いナデが加えられている。2029は天井部1/3が回転ヘラ削りにより整形されている。強いヘラ削りで砂粒の動きが顕著に認められる。2030は完形に復元できた個体で、天井部1/3はヘラ切り後未調整である。

杯 3点(2031~2033)出土している。

2031はほぼ完存する個体であるが、全体的に歪みが顕著である。杯i2に分類される。底部外面は回転ヘラ切りの後ナデにより、他は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。最後に底部内面に仕上げナデが加えられている。2032は杯j6に分類される。底部は回転ヘラ削り後未調整で、中心部はヘラのあたりが認められない状態である。底部内面を指オサエの後、底部～口縁部内面・体部～口縁部外面が回転ナデにより仕上げられている。2033はほぼ完存する個体で、杯kに分類される。口縁部・体部・底部が直線的である点が特徴的である。底部はヘラ切り後未調整で、口縁部内外面と底部～体部内面は回転ナデにより仕上げられている。一方体部外面には補助ケズリが認められる。また口縁部と体部の境外面には1条の沈線が認められる。

高杯 2034の1点に限られる。無蓋高杯Eに分類される高杯である。内外面とも回転ナデを基調とし、杯底部外面は回転ヘラ削りにより整形され、ナデが加えられている。最後に口縁部下部と杯底部上端に各1条の凹線が施されている。

鰐 2035の1点のみである。外反する頭部に対して口縁部が直線的なタイプで、口頭部のみが残存する。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。口縁部と頭部の境に1条、頭部中位に2条の凹線がそれぞれ施されている。

壺 2036~2038の3点である。

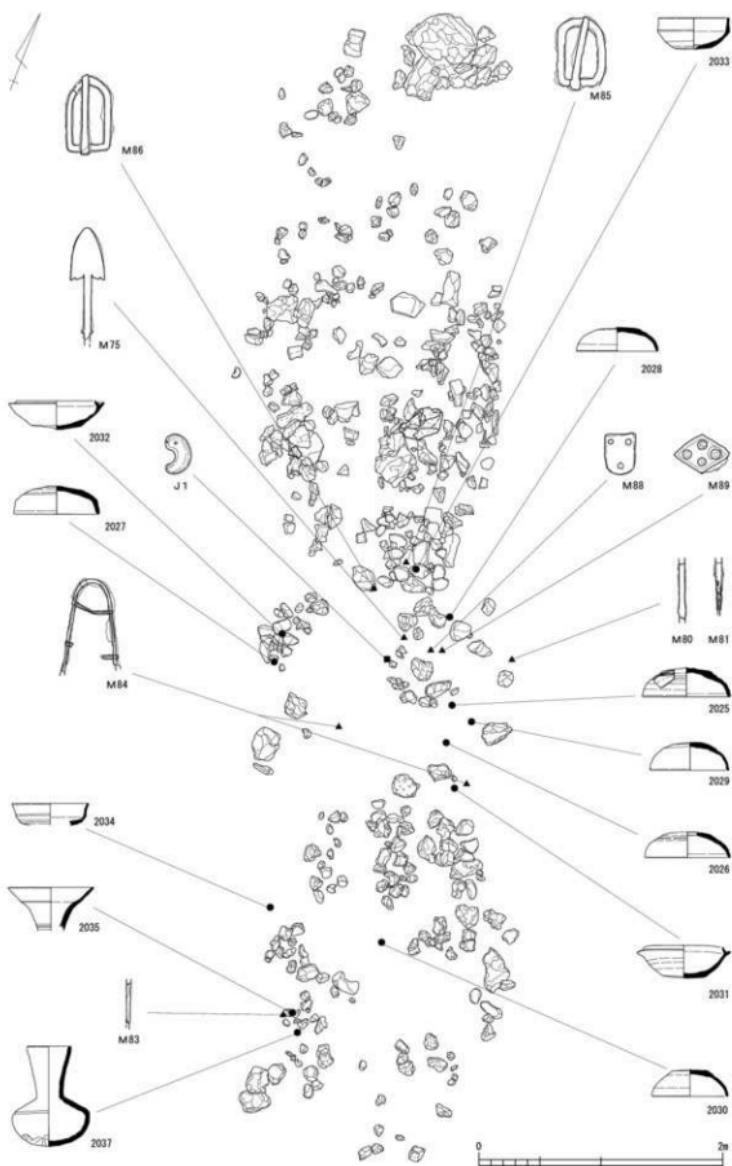
2036は短頭壺である。扁球形の体部に口縁部が短く直立する。体部外面中位には凹線が1条認められる。内外面とも回転ナデを基調とし、体部中位以下外面は回転ヘラ削りにより仕上げられている。底部内面はヘラナデにより仕上げられている。肩部外面には重ね焼痕が認められる。

2037は口縁部の一部を除いてほぼ完存する。玉葱形の体部に直線的な口縁部が付く長頭壺である。体部中位から口縁部外面および口縁部内面は回転ナデにより仕上げられている。体部下半から底部にかけての外面は、弱い静止ヘラ削りにより仕上げられている。

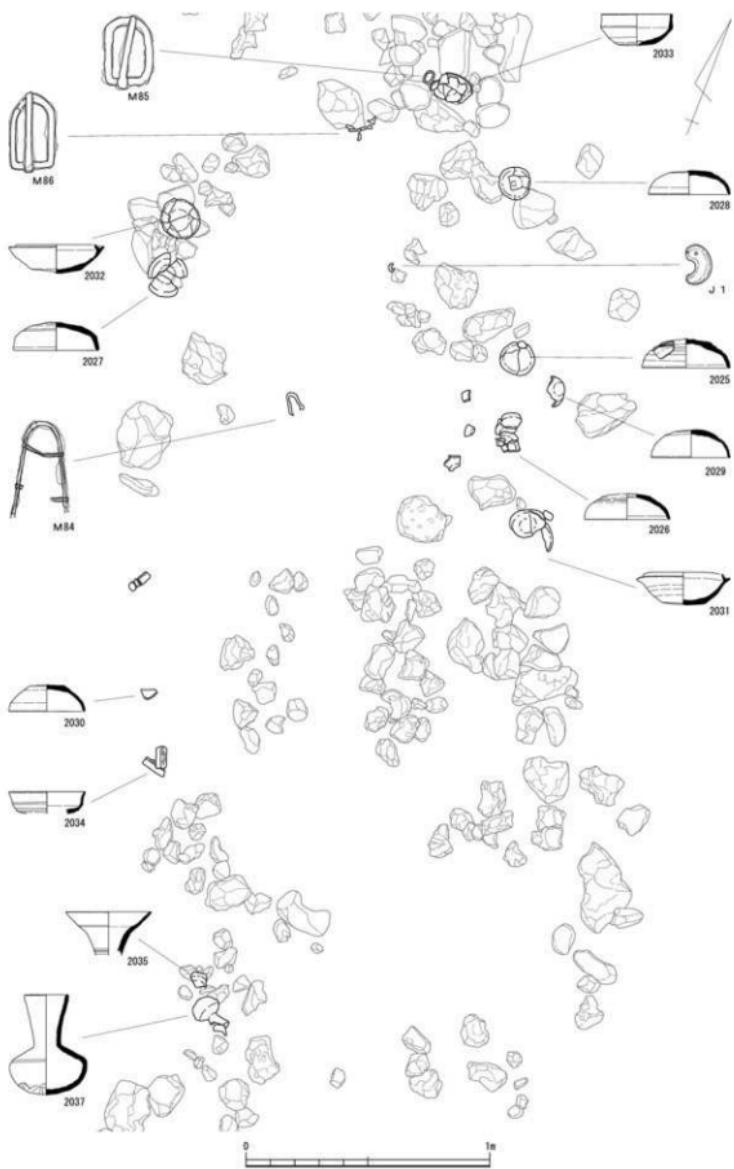
2038は完形に復元できた脚付長頭壺である。口頭部は完存し、その高さは9.80cmを測る。脚部下半は内湾傾向にあり、脚部高3.65cmを測る。口縁部から脚部にかけて、内外面とも回転ナデを基調として仕上げられている。一部、体部下半外面は弱い回転ヘラ削りにより、脚部上半外面は体部との接合に伴うナデにより仕上げられている。頭部外面中位には2条の凹線が、下端部には斜方向の刻み目が施されている。さらに体部外面上半部には2条の凹線が間隔をあけて施され、その間に4条～5条からなる波状文が施文されている。脚部外面中位にも凹線が1条認められる。



第369図 床面の検出作業



第370図 初葬面遺物出土位置図



第371图 初葬面遗物出土状况图

金属製品 鉄鎌と馬具が出土している。

鉄鎌 M75～M83の9点が出土している。

M75～M77は有頭式の鉄鎌である。M75は茎を除いて完存し、残存長は8.15cmである。鎌身は三角形をなし、鎌身長4.30cm、最大幅2.80cmを測る。鎌身横断面は平造で、中央部における厚さは2.5mmである。鎌身側は逆刺の中間に切れ込みが入る2段の逆刺となっている。その幅は2.80cmを測る。頭部は長さ4.50cmを測り、横断面は5.5mm×4mmの長方形となっている。茎との境は棘闇となっており、その幅は8mmを測る。茎は長さ5.5mm残存し、横断面は4.5mm×4mmの長方形となっている。

M76とM77は頭部から茎にかけて残存する。M76は残存長7.90cmを測る。頭部は3.30cm残存し、横断面は6mm×4mmの長方形をなしている。茎との境は棘闇をなし、その幅は8mmを測る。茎は完存し、その長さは4.60cmである。横断面は4mm×4mmの方形をなしている。一部に樹皮巻き痕を観察することができる(写真図版238)。M77は残存長6.70cmを測る。頭部は3.40cm残存し、横断面は5mm×4mmの長方形をなしている。茎との境は棘闇をなし、その幅は7mmである。茎は3.30cm残存し、横断面は4.5mm×4.5mmの方形をなしている。表面には糸巻き・木質・樺巻痕が認められる(写真図版238)。

M78～M80は頭部と考えられる。M78は残存長3.85cmを測り、横断面は5.5mm×3.5mmの長方形をなしている。M79は残存長2.25cmを測り、横断面は5mm×3.5mmの長方形をなしている。M80は残存長4.60cmを測る。頭部は4.50cm残存し、横断面は6mm×5mmの長方形をなしている。茎との境は台形闇となっており、その幅は6.5mmである。茎は5mm残存し、横断面は5.5mm×4mmの長方形である。

M81は茎と頭部の一部である。残存長は3.90cmである。頭部は1.00cm残存し、横断面は7mm×4mmの長方形をなしている。茎との境は棘闇をなし、その幅は7.5mmである。茎は2.90cm残存し、横断面は4mm×3.5mmの長方形をなしている。全面に木質の遺存が認められ、一部糸巻き痕も認められる。

M82とM83は茎の一部である。M82は残存長3.30cmを測り、横断面は4.5mm×4.5mmの方形をなしている。M83は残存長3.30cmを測る。断面は先端付近で3mm×3mmの円形をなすが、鎌身側は3.5mm×3.5mmの方形をなしている。以上から鉄針の可能性も考えられたが、鉄鎌の茎として報告する。

馬具 銀吊金具・鉢具・革帶当金具・辻金具・鉢が出土している。

銀吊金具はM84の1点である。U字形をなす吊手部とハの字形に聞く脚部からなるが、脚部先端を欠く。残存長は7.70cmである。脚部先端はピンセット状に細くなり、残存長は7mmである。吊手部も幅が狭まり、その幅は6mm、厚さは3mmである。脚部は幅1.25cm、厚さ2mmを測る。脚部両側に各2箇所鉢が打ち込まれており、一箇所の鉢は完存している。その長さは1.75cmで、頭部の径は4.50mmである。鉢相互の間隔は、3.7cm・3.4cmとわずかに異なる。

鉢具はM85とM86の2点である。M85は完存し、全長6.20cm、幅4.80cmを測る。刺金は横棒に対してやや斜行した状態となっている。縁金はU字形をなし、横棒と一体となっている。縁金・横棒ともに断面は径6mm～8mmの方形傾向の円形をなしている。刺金は横棒にグリップする形で接続し、全長6.00cmを測る。断面は一辺5mmの隅丸方形をなしている。

M86も完存し、全長6.60cm、幅3.95cmを測る。縁金はU字形をなし、横棒とは一体となっている。縁金・横棒ともに断面は径4mm～4.5mmの円形をなしている。刺金は横棒にグリップ状に直接接続し、全長6.25cmを測る。断面は4mmの円形をなしている。

革帶当金具はM87・M88・M90の3点である。M87は完存する個体で、幅2.70cmの長方形板の一端が丸みを帯びたものである。丸みを帯びた側に1穴、他端に2穴の鉢穴が開けられている。全長は4.40

cm、厚さ2.5mmを測る。丸味を帯びた側の鉢穴は径4.5mmを測り、鉢は残存しない。他端の2穴には鉢が残存する。特に一方は鉢が当金物に斜行した状態で付着していた。鉢の頭部は笠形をなし、その径は一方が6.5mm、他方が7.5mmを測る。鉢の長さは1.30cmを測る。他の鉢は当金物に貫通部分のみ残存していた。なお2穴の間隔は1.00cmである。

M88も完存する個体で、幅2.55cmの長方形板の一端が丸みを帯びたものである。丸みを帯びた側に1穴、他端に2穴の鉢穴が開けられている。全長は3.40cm、厚さ3mmを測る。丸味を帯びた側の穴に鉢は残存せず、径4mmを測る。他端の2穴については鉢が完存しており、針先が互いに内側に折り曲げられている。鉢頭部は径4mmを測り、高さは1mmである。金具裏面から3mm離れた位置で内側に折り曲げられており、革の厚みを3mmと復元することができる。2穴の間隔は1.25cmである。

M90もほぼ完存する。2.55cm×1.90cm、厚さ3mmの長方形の地金の一端が弧状を呈している。縦列に鉄鉢2本が留められている。鉢は鉄地裏面で欠損している。上側の鉢の規模は、鉢頭の径が5.5mm、鉢の径が3mmを測る。もう一方の鉢の規模は、鉢頭の径が3.5mm、鉢の径が2mmを測り、長さ4mmが残存する。2本の鉢の間隔は6mmである。

辻金具はM89の1点である。平面形が菱形をなし、完存する。その規模は、一辺が2.75cm～2.80cmを測り、縦方向で4.50cm、横方向で3.20cmである。厚さは5mmである。四隅に穴が開けられ、各穴に鉢が残存した状態となっている。穴の径は5.5mm～7.5mmを測り、鉢の径2mm～3mmより明らかに大きい規模である。鉢の頭部径は6.5mm～7mmを測り、その高さは4mm～5mmを測る。鉢の長さは頭部を含め1.65cm～1.95cmを測る。3本の鉢の長さが1.95cmを測ることから、1.65cmの鉢については先端が欠損しているものと考えられる。金具裏面からの長さは7mm～1cmである。また鉢相互の間隔は、横方向で2.00cm、縦方向で1.10cmである。

鉢はM91とM92の2点で、いずれも両頭タイプの鉢である。M91は全長3.25cmを測る。鉢の頭部は径4.5mm、高さ5mmを測り、針部分の長さは2.00cmである。針部の断面は3.5mm×3mmの円形をなしている。M92は全長3.10cmを測る。頭部は径6mmを測り、鉢部分の長さは1.90cmである。鉢の断面は径3mmの円形をなし、表面に木質の付着が認められる。

玉類 勾玉が1点(1)出土している。11は蛇紋岩製で完存する。全長2.70cmを測る。頭部の穿孔は片面穿孔で、その径は1.8mmを測る。体部は扁平で、頭部と体部の境には棱が認められる。

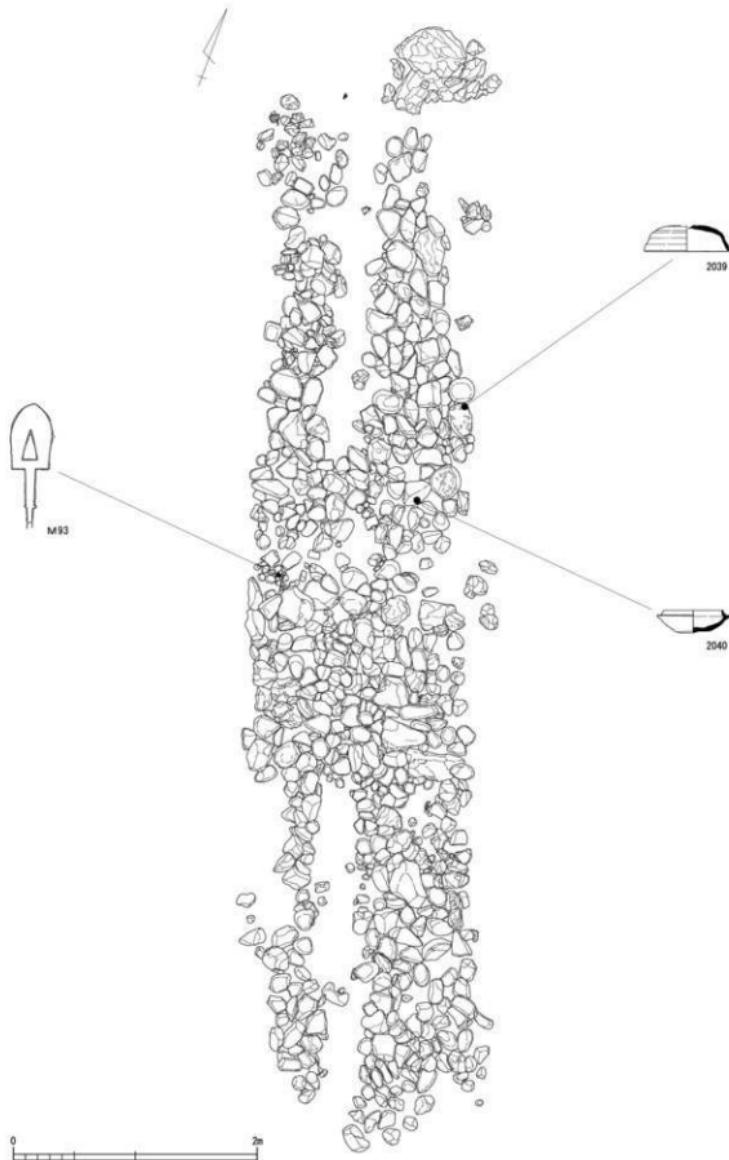
第1次追葬面(第372図) 須恵器2点と金属製品に限られる。石室中央部から北半部にかけて分布が認められる。須恵器に関しては、原位置は保たれていないものと考えられる。

須恵器 杯蓋(2039)と杯(2040)が出土している。2039は杯蓋uに分類され、焼成が不十分な製品である。2040は完形に近い個体で、杯j9に分類される。底部外面はハラ切り後未調整である。

金属製品 鉄錐と馬具が出土している。

鉄錐 5点(M93～M97)出土している。

M93は有頭式鉄錐で、茎の先端を除いて完存する。残存長は9.75cmである。錐身は柳葉形で、錐身長は5.40cmを測る。錐身幅は最大で3.60cmを測り、横断面は平造である。中央部における厚さは4.50mmである。錐身のほぼ中央に三角形の透かし穴が開けられている。透かしの規模は、底辺が1.30cm、長辺が2.60cm・2.50cmを測り、二等辺三角形をなしている。錐身間は角間をなし、その幅は3.00cmである。頭部は3.10cmを測り、横断面は8.5mm×4.5mmの長方形である。茎との境は棘間をなし、その幅は9.5mmである。茎は1.25cm残存し、横断面は5.5mm×4.5mmの長方形である。木質の付着は認められない。



第372図 第1次追葬面遺物出土状況図

M94は長頭式の鉄鎌である。鎌身から頭部にかけて残存し、残存長は7.25cmである。鎌身は柳葉形をなし、全長6.5mmを測る。鎌身幅は7.5mmで、断面は片丸造で先端部にわずかに稜が認められる。中央部における厚さは2mmである。頭部は6.60cm残存し、横断面は5.5mm×4mmの長方形をなしている。

M95は鎌身の一部である。柳葉形の鉄鎌と考えられ、残存長は3.50cmである。横断面は平造で、幅は9mmを測る。中央部における厚さは3mmである。

M96とM97は有頭式鉄鎌の一部で、頭部から茎にかけて残存する。M96は残存長12.30cmを測る。頭部は8.20cm残存し、横断面は5.5mm×5mmの長方形をなしている。茎との境は棘開をなし、その幅は8mmである。茎は4.10cm残存し、横断面は4mm×3mmの長方形をなしている。関部付近を中心に木質が良好に遺存し、横断面は8mm×8mmの円形をなしている。

M97は頭部から茎にかけて5.30cm残存する。頭部は4.40cm残存し、横断面は6.5mm×4mmの長方形をなしている。茎との境は棘開をなし、その幅は7mmである。茎は9mm残存し、横断面は4mm×4.5mmの長方形をなしている。

馬具 M98とM99の2点出土している。

M98は革帶当金具である。完存する個体で、幅2.75cmの長方形板の一端が丸みを帯びたものである。丸みを帯びた側に1穴、他端に2穴の鉢穴が開けられている。全長4.55cm、厚さ3mmを測る。丸味を帯びた側の鉢穴は径2mmを測り、鉢が折れ曲がった状態で出土している。頭部を含めた鉢の長さは1.55cmを測る。他端の2穴についても鉢が残存した状態で出土している。一方は頭部を含めて1.00cm残存し、頭部の径は4.75mmを測る。金具に対してやや斜行した状態で出土している。他方は頭部を含めて8mm残存し、頭部の径は8.5mmを測る。この2穴の間隔は9mmである。

M99は環状をなす製品である。両端を欠く。断面は径4.5mmの円形をなしている。

第2次追葬面(第373図) 鉄刀と鉄鎌が出土している。當面に伴う土器の出土は認められない。

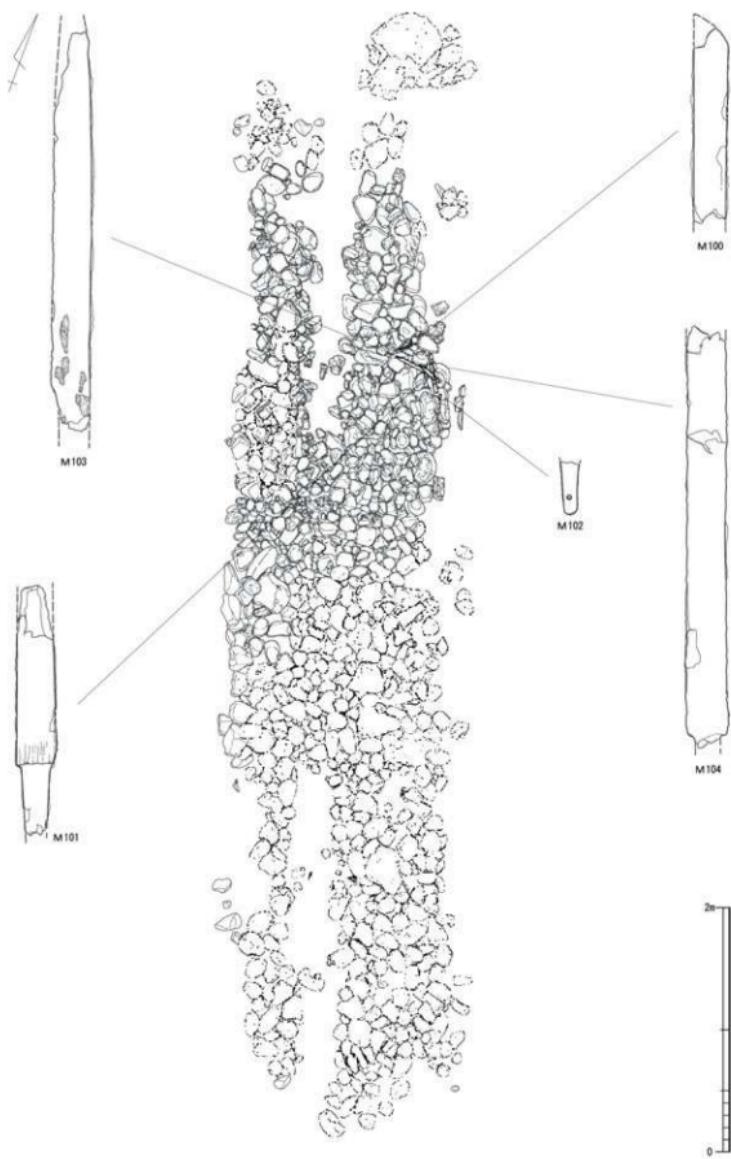
鉄刀 M100～M104の5点である。5点とも復元された玄室中央部東辺付近からまとまって出土している。M102については想定される側壁のラインとほぼ平行していることから、原位置が保たれているものと考えられる。M100とM101については、その出土状況から原位置が保たれているとは言い難い出土状況である。完存するものは認められず個体数を明確にすることは困難であるが、少なくとも3本はあったものと考えられる。

M100は刃部先端を中心に残存する。ただし切先を欠き残存長は15.90cmである。刃幅は最大で3.00cmを測り、背幅は1.00cmである。

M101は茎の基部と刃先を欠き、残存長は20.50cmを測る。刃部は14.95cm残存し、断面は鋭角な三角形をなす。中央部における刃幅は3.20cmを測り、背幅は1.20cmである。関部付近に木質の遺存が認められる。茎との境は不均等な両開となっている。茎は5.55cm残存し、関部付近の幅は2.35cmを測る。横断面は台形をなし、背幅は9mmを測る。

M102は、共伴する製品から判断して鉄刀の茎と考えられる。残存長は4.35cmである。最大幅1.60cmを測り、厚さは4mmである。尻部付近には径3.5mmの目釘穴が開けられている。

M103は関部から刃部にかけて残存する鉄刀である。刃部については先端部を欠き、残存長は32.70cmである。刃部は29.08cm残存し、中央部における幅は3.17cmを測る。背幅は0.70cmである。茎との境は撫角の片開となっており、関幅は3.28cmを測る。茎は3.62cm残存している。関部を中心に木質の遺存が認められる。



第373図 第2次追葬面遺物出土状況図

M104は鉄刀の身である。切先と茎の大半を欠き、関部がわずかに残存している。残存長は34.70cmである。刃幅は3.25cmを測り、横断面は鋭角な三角形をなしている。桿幅は8mmである。茎は1.20cm残存し、刃部との境は均等の両関となっており。その幅は両側とも6mmを測り、茎の幅が2.10cmと復元することができる。またX線透過撮影(第374図)から、当品は鍛造品であることが理解できる。

鉄鎌 M105の1点である。有頭式の鉄鎌で、鎌身から頭部にかけて残存する。残存長は4.35cmである。鎌身は先端を欠き、全長3.25cmを測る。最大幅は8mmを測り、横断面は平造である。中央部における厚さは2mmである。頭部との境は角間となつておらず、その幅は6mmを測る。頭部は1.10cm残存し、横断面は4.50mm×3mmの長方形をなしている。

5. 墳丘南側出土遺物

(図版92~96 写真図版228~237・243・244 附表91・92・105・109)

当墳の南側一帯(前庭部)で多くの土器・金属器が散乱した状態で出土している。

これらの遺物の出土地点は土器群1~土器群4の大きく4地点に集約される(第375

図)。このなかで、2050が土器群2と土器群3から出土した破片同士が接合関係にあること、2084が土器群3と土器群4から出土した破片同士が接合関係にある(第377図)。

さらに土器群3を中心に出土した2038と2030については、初葬面出土土器の破片と接合関係にある(第377図)。

金属器については、石室内への副葬品としてふさわしい内容である。逆に石室との関係なしには理解に苦しむ内容である。土器についても同様である。

以上から、これらの遺物については南構1号墳における追葬過程において石室外(前庭部)へ搔き出された遺物、あるいは石室の破壊に伴い石室外へ出された遺物の可能性が高いものと考えられる。具体的な内容は、以下のとおりである。

出土状況 出土地点は大きく4箇所からなる(第375図:土器群1~土器群4)。その位置は、石室開口部の南西部(土器群1・2)、南部(土器群3)、南東部(土器群4)に分かれる。南西部については、土器群2が墳丘に近接した位置に、土器群1が墳丘から約4m離れた位置にあたる。土器群3は開口部の墳丘斜面から2mの範囲に位置している。土器群4は1号墳石室開口部から約5m南東側にあたる位置である。各土器群から出土した遺物の内容は以下のとおりである。

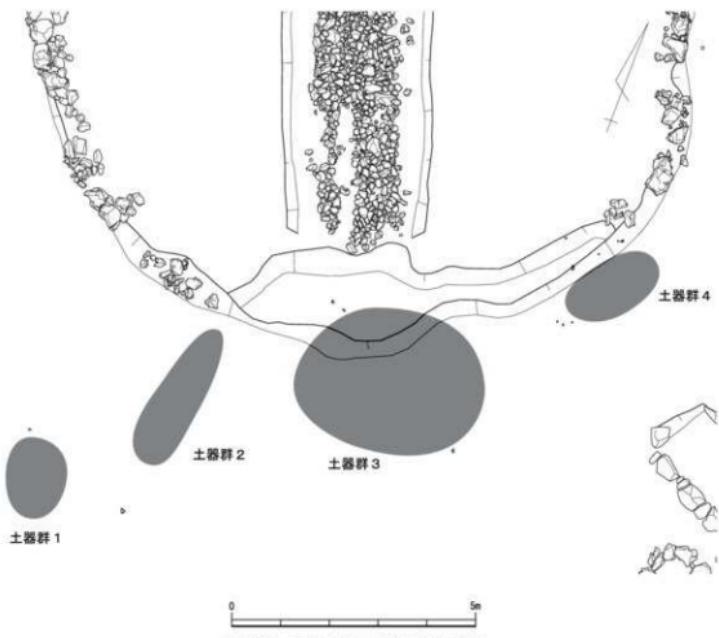
なお先述した土器群相互の接合関係から、少なくとも土器群2・土器群3・土器群4はほぼ同時期のものと考えられる。

土器群1(第378図) 須恵器の壺(2041~2043)と高杯(2044)が出土している。壺は体部片(2041)を中心とし、数体分がほぼ直線上に分布している。特に2041と2042については、後述するように完形に復元されることから、1個体がその場で押し潰されたものと考えられる。

壺 2041は完形に復元される個体である。壺Fdに分類され、体部最大径に対して頭径が小さい点が特徴である。倒卵形をなす体部に口縁部がわずかに外反する。端部は外面が帶状に肥厚し、明確な端面をなす。体部外面は直交する二方向の平行叩き整形を基本とし、大半がカキ目により仕上げられている。内面は當て具痕が顕著である。口頭部内外面は回転ナデにより仕上げられている。



第374図
M104X線透過写真



第375図 南構 1号墳南側遺物出土位置

2042もほぼ完形に復元される個体である。壺Eに分類され、球形をなす体部に口縁部が短く外反している。口縁端部は内外両方向につまみ出されている。体部は二方向の平行叩きを基本に仕上げられ、部分的にナデにより叩き目が消されている。このため、叩き目の残存は良好ではない。内面は當て具痕が顕著である。口頭部内外面は回転ナデにより仕上げられている。

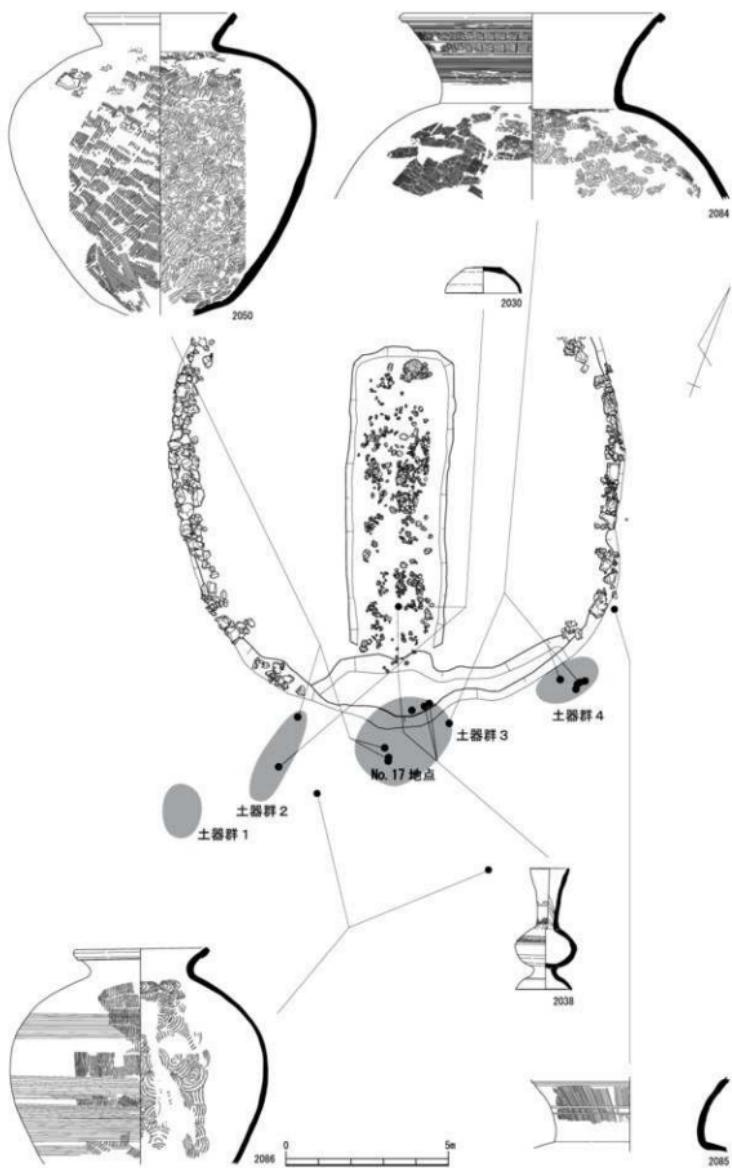
2043は口縁部から肩部にかけて残存する。口縁端部は外側が玉縁状に肥厚している。体部は平行叩きの後カキ目により仕上げられている。内面は當て具痕がナデにより消されている。口頭部は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

高杯 2044の1個体が出土している。2044は脚部のみ残存する。脚Daに分類されるもので、残存する範囲において透かしは認められない。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。杯部内面は仕上げナデが認められる。

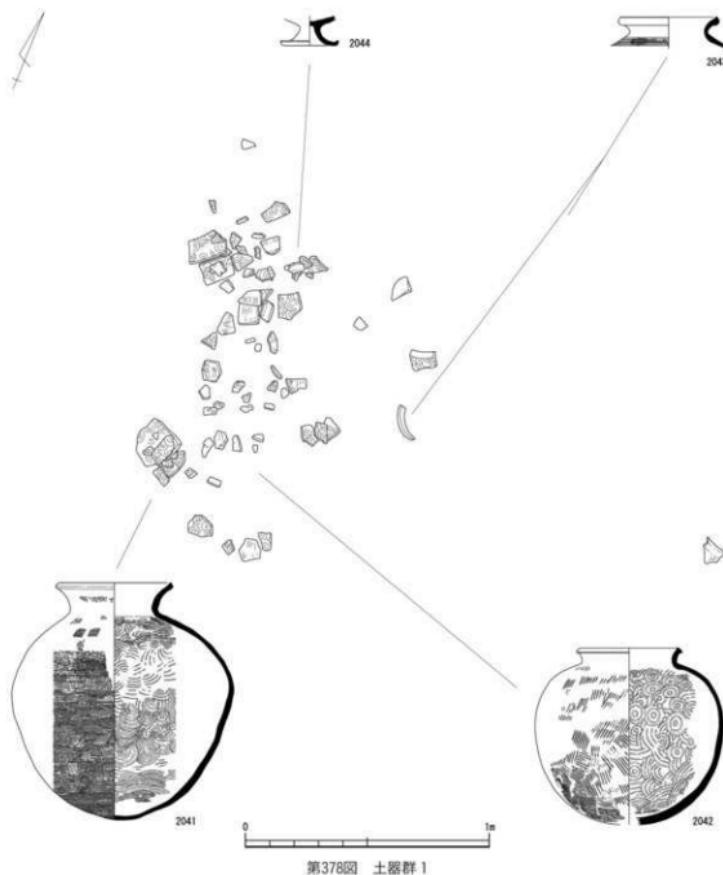
土器群2(第379図) 土器群1の北東側に位置する。ほぼ直線的に分布する土器群で、その範囲は長さ3mに及ぶ。土器群からは須恵器の高杯(2045~2049)と壺(2050)が出土している。特に壺が分布の主体を占め、ほぼ全域に分布が認められる。



第376図 2042内面拓影



第377図 南構1号墳南側遺物出土位置

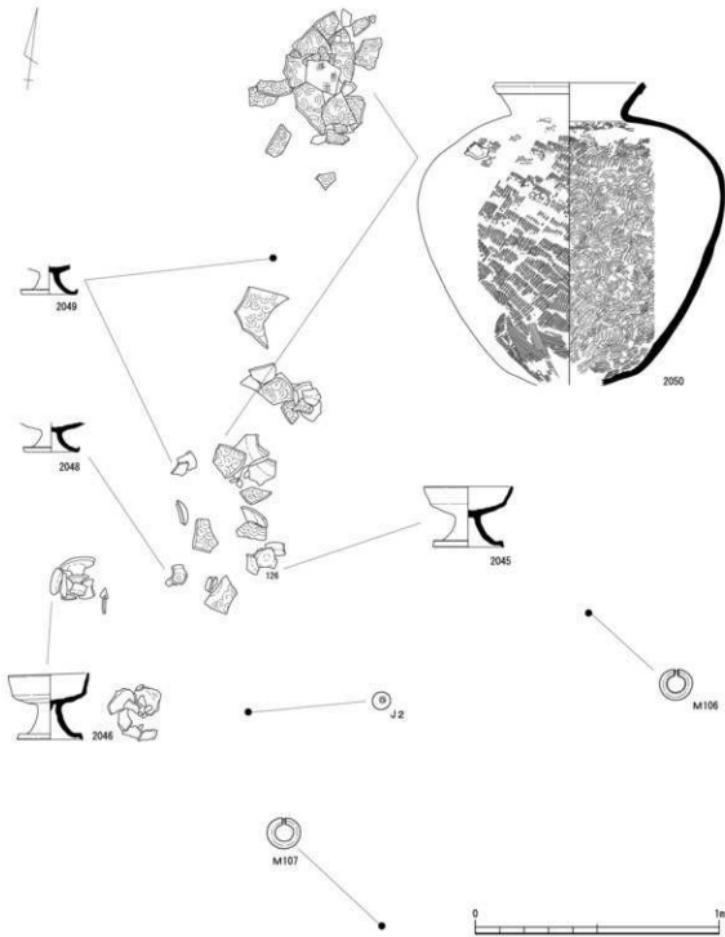


この他、上記土器群の南東側において耳環が2点(M106・M107)出土している(後述 第379図)。

高杯 2045~2049の5個体が出土している。

2045は脚高5.10cmの無蓋高杯Gbである。杯部から脚部まで完形に復元できる個体である。杯部は、口縁部と体部の境が明瞭な杯形をなしている。脚部は端部が下方に折り返され、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。透かし孔は認められない。杯部は内外面とも回転ナデを基調としているが、脚部付近は回転ヘラ削りが施されている。また杯底部内面には仕上げナデが認められる。

2046は脚高5.60cmの無蓋高杯Gaである。杯部から脚部まで完形に復元でき、脚部は完存する。杯部は、口縁部と底部の境が明瞭な杯形をなしている。内外面とも回転ナデを基調とし、脚部付近の杯底部外面は回転ヘラ削りにより仕上げられている。杯底部内面には仕上げナデが認められる。脚部は端部が下方に折り返され、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。脚部外面から内面脚端部付近にかけ

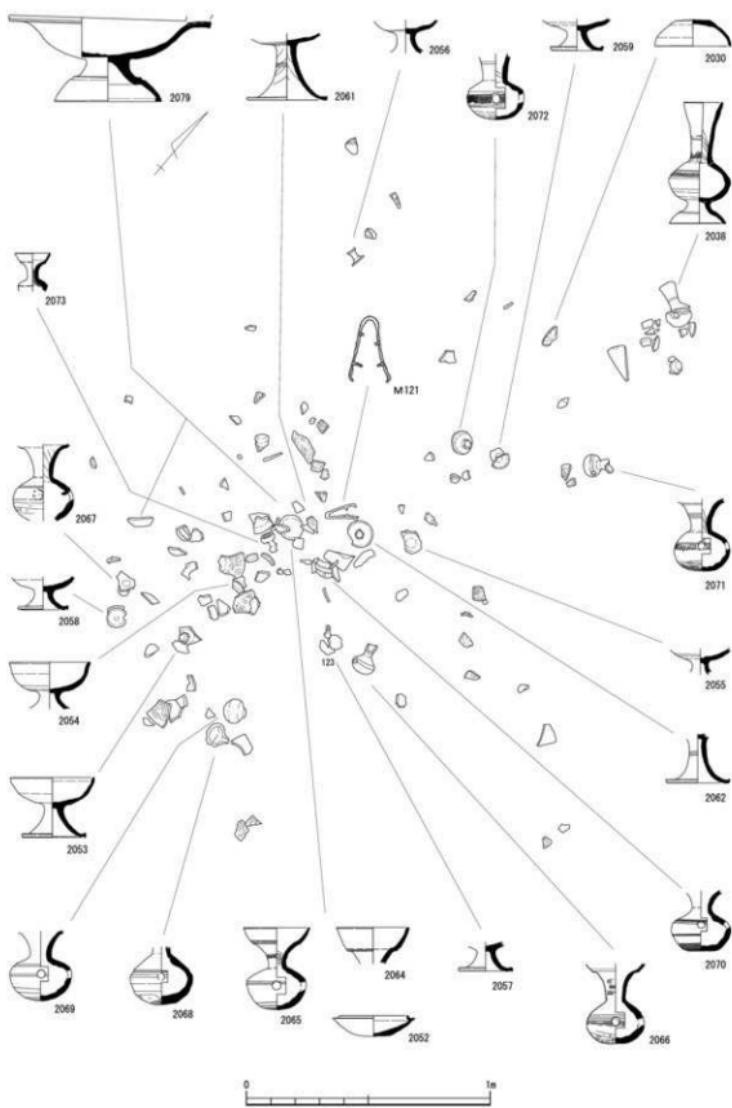


第379図 土器群2と耳環出土位置

ては灰被りが認められる。透かし孔は認められない。

2047は短脚高杯の脚Dcである。脚端部は上下に肥厚傾向にある。脚高3.40cmを測る。2049は脚高3.30cmの脚Daである。脚端部が上方に摘まみ上げられ、2048と同タイプである。杯部内面および脚部内外面は回転ナデにより仕上げられている。杯部外面は、回転ヘラ削りの後回転ナデにより仕上げられている。脚部には、残存する範囲で透かし孔は認められない。

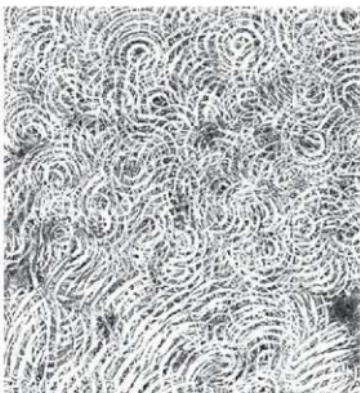
2048は脚Daに分類される。脚端部は上方に摘まみ上げられている。杯部内面がナデにより仕上げられている以外、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。残存する範囲において、脚部には透かし孔



第380図 土器群3



第381図 2050外側



第382図 2050内面拓影

は認められない。

甕 2050は底部を除いて完形に復元される個体である。甕Pbに分類され、倒卵形をなす体部に口縁部が直線的に伸びている。口縁端部は外面が帯状に肥厚し、その断面は長方形をなしている。体部最大径に対して口径が狭い傾向にある。体部は二方向の平行叩きにより仕上げられているが、底部付近にはハケが加えられている(第381図)。内面は當て具痕が顕著に認められる(第382図)。口頭部は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。肩部には他の土器の釉着が認められる。

土器群3(第380図) 土器と金属製品が出土している。

土器 全て須恵器からなり、杯・杯蓋・高杯・甕・装飾付須恵器、甕の各器種が出土している。特に高杯と甕の出土が顕著である。そしてこれらの器種については、完形ではないが比較的形を留めた状態での出土傾向が認められる。

杯蓋 2030と2051の2個体が出土している。2030は初葬面から出土した破片との接合関係が認められた個体である。土器の詳細は先述した通りである(391ページ)。2051は杯蓋qに分類され、天井部が完存し全体の約1/3がヘラ切り後未調整である。天井部内面に仕上げナデが加えられている。

杯 2052の1個体が出土している。杯j2に分類され、ほぼ完存する。底部から体部にかけての外面2/3はヘラ切り後未調整である。火彫れの目立つ製品である。

高杯 2053~2062の10個体が出土している。全て無蓋高杯で、短脚と長脚の2タイプが認められる。

杯部が残存する個体は2053・2054・2060の3個体である。2053は完形に復元できた個体で、無蓋高杯Hdに分類される。杯部は楕形をなし、口縁部内面がわずかに肥厚している。脚部は脚高4.80cmの短脚である。脚端部は折り返され、下方へつまみ出されている。残存する限り透かし孔は認められない。杯部・脚部とともに内外面が回転ナデにより仕上げられている。接合部外面のみ、接合のためのナデにより仕上げられている。

2054は杯部と脚部の一部が残存し、無蓋高杯Hbに分類される。杯部が深い楕形をなす高杯である。杯部は内外面とも回転ナデにより仕上げられ、底部内面には仕上げナデが施されている。杯部外面下半は回転ヘラ削りにより仕上げられている。脚部は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

2060は杯部と脚部の一部が残存し、無蓋高杯Fに分類される。杯部は皿形をなし、口縁部は大きく外反している。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、内面には仕上げナデが加えられている。脚部は6.35cm残存し長脚と判断されるが、透かしは認められない。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、内面の一部にはしづり目が残存する。外面には2条の凹線が施されている。

脚部 脚Ab・脚Da・脚Ddが出土している。

脚Abは2061と2062の2個体である。2061は脚部と杯部の一部が残存する。脚部は脚高9.00cmの長脚で、残存する限り透かし孔は認められない。脚端部は上方に摘まみ上げられ、端面を有する。脚部は下半部が内外面とも斜方向のナデの後回転ナデにより仕上げられ、上半部外面は斜方向のナデ、内面は斜方向の指ナデにより仕上げられている。中位や上側には2条の凹線が施されている。杯部は、内面が回転ナデの後仕上げナデが加えられている。外面は回転ナデを基調とし、脚部付近は弱い回転ヘラ削りが施されている。2062は脚部がほぼ完存する。脚高6.75cmの長脚であるが、透かしは認められない。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、内面には絞り痕が認められる。端部は大きく外反し、端面を有する。脚部中位外面には2条の凹線が施されている。杯部は底部がわずかに残存し、回転ナデの後ナデにより仕上げられている。

脚Daは2059の1個体である。2059は脚部と杯部の一部が残存する。脚部は高さ3.10cmの短脚で、端部は上方に摘まみ上げられている。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。杯部についても同様である。

脚Ddは2057と2058の2個体である。2057は脚部と杯部の一部が残存する。脚部は脚高3.45cmの短脚で、残存する限り透かし孔は認められない。脚端部は下方にわずかに屈曲し、端面を有する。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。杯部は内面が回転ナデの後仕上げナデが加えられている。外面は、脚部との接合のためのナデにより仕上げられている。2058は脚部がほぼ完存し、杯部は一部が残存する。脚部は高さ2.90cmの短脚で、透かしは認められない。端部は外方に折り曲げられ明確な端面を有する。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。杯部についても同様である。

この他、杯部から脚部への接続部を中心に残存する個体が2点(2055・2056)出土している。2055は杯部と脚部の接合部を中心に残存している。内外面とも回転ナデを基調として仕上げられている。接合部外面が回転ヘラナデにより仕上げられ、杯部内面には仕上げナデが認められる。2056は杯部と脚部の一部が残存する。杯部と脚部の内外面は回転ナデにより仕上げられている。接合部外面はナデにより仕上げられている。

鰐 10個体(2063~2072)出土している。内外面とも回転ナデを基調として仕上げられている。

2063は口縁部から頭部にかけて残存する。外反する頭部に対して内湾傾向にある口縁部が付く。頭部内面は最終的に斜方向の強いナデにより仕上げられている。口縁部下端外面には1条の、頭部上半外面には2条の凹線が施されている。

2064は口縁部のみが残存する。外反する頭部に対して、内湾する口縁部が取り付く。

2065は体部が完存し完形に復元される個体で、癒Baに分類される。底部外面が回転ヘラ削りにより仕上げられている。一部頭部内面には絞り痕が認められる。口頭部は外反する頭部に対して口縁部が内湾し、口縁部下端に1条、頭部中央部に2条の凹線が施されている。体部は最大径が口径に近く、中位に1条の凹線が施されている。その後この凹線上に径1.5cmの孔が開けられている。

2066は口縁部をのぞいてほぼ完存する個体で、癒Caに分類される。底部外面が弱い多方向の静止ヘラ

削りが施され、その後体部側を中心にナデにより仕上げられている。底部外面中心付近は未調整で、粘土の付着が認められる。頭部と体部中位外面はカキ目により仕上げられている。口縁部は外反する頭部に対してやや内清気味に聞くタイプで、その変換部外面に1条の凹線が施されている。体部中位やや上側には2条の凹線が施され、その後径1.45cmの孔が開けられている。

2067は口縁部と底部を欠く個体で、趣Caに分類される。頭部上端部の残存状況から、外反する頭部に対して内溝する口縁部が付くタケイブと考えられる。頭部内面の絞り痕が顕著である(第383図)。体部は玉葱形をなし、内面は回転ナデにより仕上げられている。外面は、上半が回転ナデ、下半が静止ヘラ削りにより仕上げられている。底部付近はナデにより仕上げられている。体部中位には径1.40cm~1.60cmの透かし孔が開けられている。

2068は趣Cに分類される。内面は回転ナデを基調とし、肩部から頭部にかけてはナデにより仕上げられている。外面は、体部上半から頭部にかけて回転ナデにより仕上げられている。中位から下半は回転ヘラ削りにより、底部は静止ヘラ削りにより、それぞれ仕上げられている。その後体部中位に2条の凹線が施され、下側の凹線上に径1.10cmと復元される透かし孔が開けられている。上側の凹線下側にはこれと平行する幅の狭い凹線がもう1条施されている。

2069は口縁部を欠くが頭部の一部が残存し、体部が完存する。趣Bbに分類される。体部上半から頭部にかけての内外面は回転ナデにより仕上げられ、体部下半から底部にかけての外面は回転ヘラ削りにより仕上げられている。特にヘラ削り痕が顕著である。体部中位と体部上半部に各1条の凹線が施され、その後体部中位の凹線上に径1.30cm~1.40cmの透かし孔が開けられている。

2070は口縁部を欠くが、頭部以下が完存し、趣Baに分類される。体部下半外面には回転ヘラ削りが加えられている。また、体部中位と底部外面にはカキ目が施されている。体部中位より上側には2条の凹線が施され、その後下側の凹線上に径1.25cmの透かし孔が開けられている。

2071は口縁部をのぞいてほぼ完存する個体で、趣Cbに分類される。底部外面が静止ヘラ削りにより仕上げられている。頭部内面体部付近には、体部との接合の際に生じたと考えられる絞り痕が認められる。頭部外面中央付近には2条の、口縁部付近には1条の凹線が施されている。体部外面中位には2条の凹線が8mmの間隔をあけて施され、その間に刻み目が施されている。刻み目を施した後、凹線間に径1.25cm~1.35cmの孔が開けられている。

2072は頭部上半以上を欠くが、体部以下はほぼ完存する個体で、趣Abに分類される。底部外面が回転ヘラ削りにより仕上げられている。頭部外面には1条の凹線が施されている。体部外面には2条の凹線が1.80cmの間隔をあけて施され、その間に刻み目が施されている(第384図)。その後、刻み目が施された凹線間に径1.45cm~1.65cmの孔が開けられている。

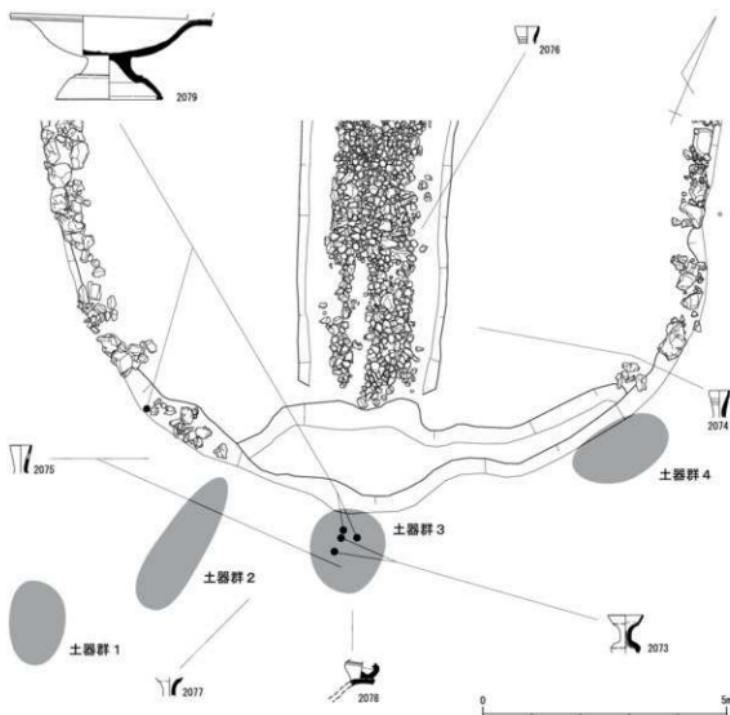
装飾付須恵器 2079の1個体が出土している。口径33.00cmと大型の器台である。口縁部・台部とも、内外面は回転ナデにより仕上げられている。台部は、上半が外反し下半が内溝する2段構成からなり、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。上半部と下半部の境の外面は上方にわずかに摘まみ上げられ、装飾性が認められる。さらに下端部は内外両方向に摘まみ出され、接地面が形成されている。口



第383図 2067頭部内面



第384図 2072刻み目

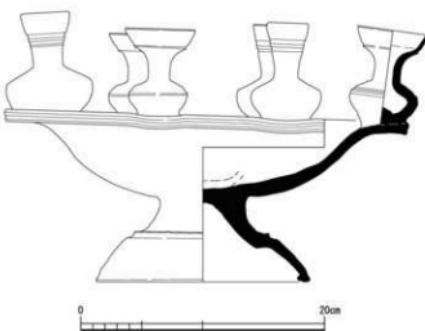


第385図 装飾付須恵器出土位置図

縁部は大きく皿形に開き、水平方向に外反している。この口縁部上面には円形の貼り付け痕が認められる。さらに受部中央部にも径6.20cmの円形の剥離痕が認められ、当該箇所にも壺等が貼り付けられていたものと復元できる。

この他、形態・色調・胎土が酷似する2078は、口縁部片に小型壺の下半部が貼り付けられた状態で出土している。2078は土器群3の南側から出土した個体で、体部下半のみ残存し、器台の口縁縦部に沿うように貼り付けられている。体部最大径が5.60cmと小型の壺である。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、外面中位には2条の浅い凹線が認められる。

さらに、直接の接合関係は認められなかったが、2073～2077の小型壺もしくは

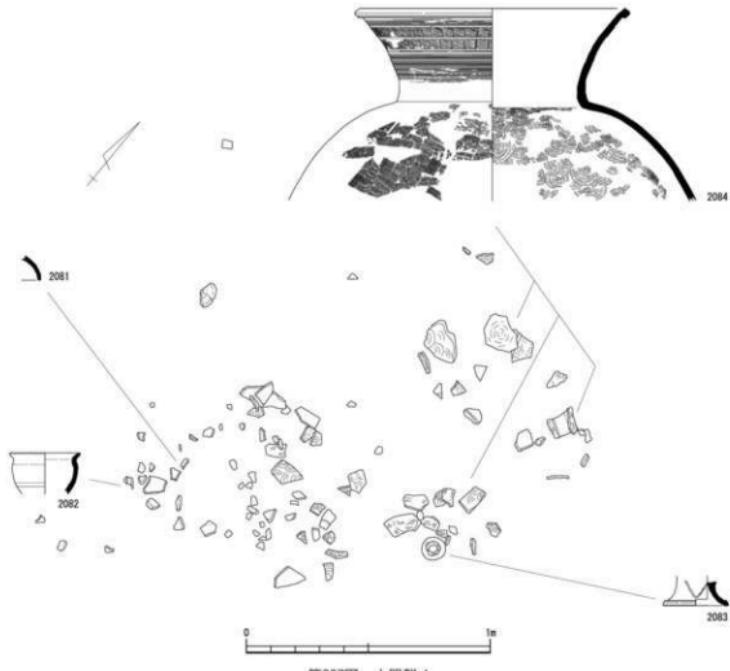


第386図 2079復元図

甌が、2079が出土した地点を中心とした範囲から出土している(第385図)。2078同様胎土・色調等の特徴も類似することから、本来はこれらと同一個体であったと考えられる。具体的には、これらの甌・甌が2079の口縁部上に貼り付けられていたものと考えられる。そして口縁部上には6個の小型甌が貼り付けられていたものと復元することができる(第386図)。

2073は土器群3から出土した個体で、口頭部の形態的特徴から甌を模した可能性が考えられる。ただし、体部に円孔は認められない。内外面とも回転ナデを基調とし、頭部内面は絞り目が顕著に認められる。体部中央部には浅い凹線状の窪みが認められる。2074は石室の東側から出土した個体で、口縁部のみ残存し、その特徴は2075と同じである。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、外面には2条の凹線が施されている。2075は、土器群3と土器群2の北西側から出土した直接の接合関係はない2片からなり、図上で口縁部として復元された個体である。外面は回転ナデにより仕上げられ、内面は灰被りにより調整は観察できない。ただし頭部付近はしづり目が認められる。2076は石室内初葬面から出土した個体で、口縁部のみ残存する。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、頭部付近には3条の凹線が施されている。2077は土器群2と土器群3の中間から出土した個体で、頭部を中心に残存する。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、内面下半にはしづり目が認められる。頭部と口縁部との境に段が認められることから、甌の可能性も考えられる。

甌 2050と2080の2個体が出土している。2050については、土器群2出土との接合関係が認められ



第387図 土器群4

る。2080は口縁部片で、内外面とも回転ナデにより仕上げられ、端部は外方に摘まみ出されている。

金属製品 馬具が1点(M121)出土している。

M121はほぼ完存する鎧吊金具である。U字形をなす吊手部とハ字形に聞く脚部からなる。吊手部は幅7mm、厚さ6mmの長方形の断面からなる。脚部は幅が約1.60cmと吊手部より広くなり、先端部はピンセット状に幅が狭くなるとともに内側に屈曲している。吊手部から脚部先端までの長さは10.90cmである。先端部の長さは1.05cmである。脚部には左右2本の鉄錆が外側から打ち込まれている。3本については先端を欠くが、完存する錆の長さは1.70cmを測る。錆頭の規模は4.5mm~5.5mmである。錆の位置は吊手側相互に位置が異なり、各錆相互の間隔も5.00cm・3.40cmと異なる。

土器群4(第387図) 1.50m×1.00mの範囲に分布が認められる。土器群3と異なり、全体的に小片での出土が目立つ。出土した土器は須恵器に限られ、器種としては杯蓋・壺・甕が認められる。

杯蓋 2081の1個体である。口縁部がわずかに残存し、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

壺 2082と2083の2個体である。2082は口縁部から体部にかけて残存する。口縁部はく字形に外反する。内外面とも回転ナデを基調とし、体部下半外面は回転ヘラ削りにより仕上げられている。2083は台付壺の台部である。端部は水平方向に折り返され、明確な端面を有する。上端部に剥離痕が認められる。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、外面にはV字状のヘラ記号が認められる。

甕 2084の1個体である。甕Faに分類され、口縁部から体部上半にかけて残存する。復元される体部に対して、口縁部高が高い傾向にある点が特徴的である。口縁部は直線的に外方にのび、端部外面は帯状に肥厚し、断面は方形をなす。肥厚部外面には1条の凹線が施されている。内外面とも回転ナデを基調とし、頭部付近内外面はナデにより仕上げられている。下半部外面はカキ目により仕上げられている。その後、外面には上から2条・1条・2条の順に1.80cmの間隔で凹線が施され、各凹線間に7条から8条の櫛描波状文が描かれている(第388図)。体部は二方向の平行叩きにより仕上げられ、内面には當て具痕が顕著に認められる。

第388図 2084口縁部外面

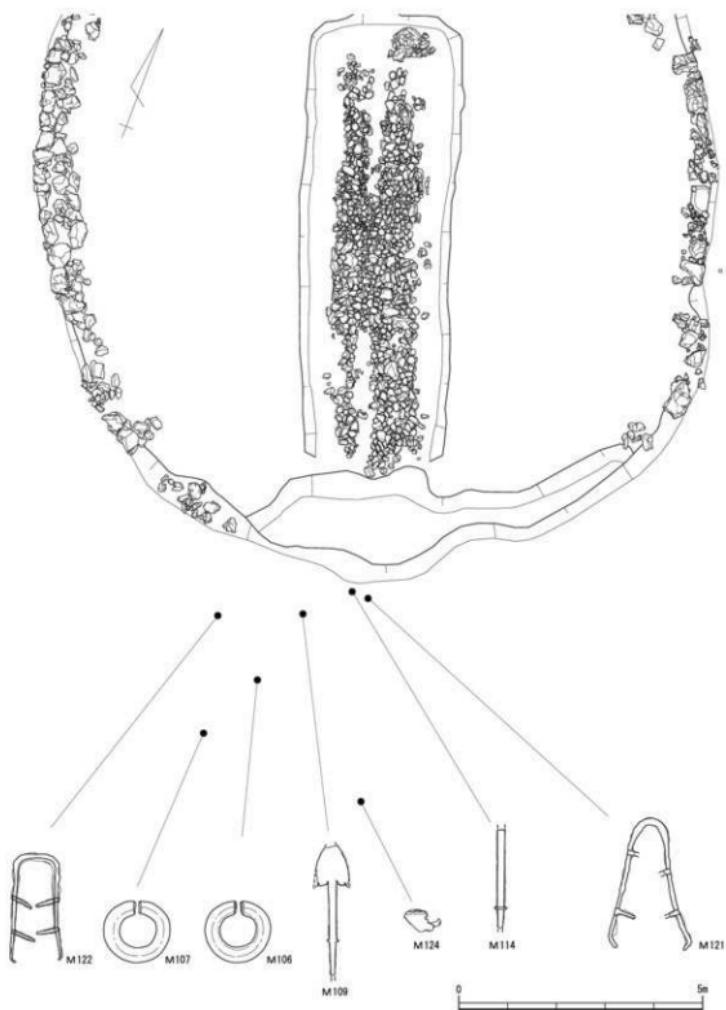
その他 上記土器群以外に、南構1号墳南側から同様の土器・金属製品・玉類が出土している。

土器 須恵器の甕が出土している。

2086の甕は、土器群2と同3の中間で出土した個体、および土器群3の南東4mの地点から出土した個体とが接合関係にある(第377図)。2086は口縁部から体部下半にかけて復元された個体である。甕Fcに分類され、口縁端部は帯状に肥厚し、断面長方形をなしている。体部外面は平行叩き整形後部分的にカキ目が施されている。内面には當て具痕が顕著に認められる。口頭部は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

土器群4の北東部からは甕の2085が出土している(第377図)。2085は頭部を中心に残存する個体である。内外面とも回転ナデを基本とし、わずかに残存する体部外面には平行叩き痕が、内面には當て具痕が認められる。頭部外面は回転ナデの後縦方向のハケが施され、最後に凹線が加えられている。凹線は頭部中位と口縁部付近にそれぞれ2条施されている。





第389図 南構1号墳南側 金属製品出土位置

金属製品 耳環・鉄鏃・刀子・馬其他が出土している(第389図)。

耳環 M106とM107の2点が出土している。いずれも土器群2の南東側で出土している(第379図)。両者の距離は1.50mである。

M106は完存する個体である。全面に鍍金が施され、良好に残存している(写真図版237)。外径は2.70cm×2.50cmを測り、開き部幅は1.8mmである。内傾は1.50cmを測る。環の横断面は8mm×6.5mmの梢円形

となっている。M107も完存する個体である。ほぼ全面に鍍金が残存している（写真図版237）。外径2.75cm×2.50cmを測り、横断面は7.5mm×6mmの円形をなしている。開き部の間隔は2mmである。

鉄鎌 9点(M109～M117)出土している。

M109は有頭式鉄鎌で、ほぼ完存する。残存長は10.65cmである。鎌身は逆刺を有する柳葉形と考えられるが、切先と逆刺を欠く。M75と同タイプと考えられ、2段の逆刺となるようである。鎌身は3.30cm残存し、最大幅は2.70cmである。断面は平造で、中央部における厚さは3mmである。頭部は5.05cmを測り、断面は6mm×4mmの長方形をなしている。茎との境は棘闇をなし、幅は8.50mmを測る。茎は2.75cm残存し、横断面は4.5mm×3.5mmの長方形をなしている。木質の遺存は認められない。

M110は短頭式鉄鎌で、鎌身から頭部にかけて残存する。鎌身は逆刺を有する柳葉形をなし、先端部と逆刺の端を欠く。鎌身の残存長は5.40cmである。最大幅は3.00cmを測り、横断面は平造である。中央部における厚さは4mmである。残存長は5.40cmを測る。逆刺は先端部を欠き、残存長は1.40cmである。頭部は3.50cmを測り、横断面は7mm×4mmの長方形をなしている。茎との境は台形闇をなし、その幅は9.5mmである。茎は3mm残存し、その断面は5mm×4mmの長方形をなしている。

M111は三角形鎌で、鎌身のみ残存する。鎌身残存長は3.60cmである。最大幅は2.30cmを測り、横断面は片丸造で、中央部の厚さは2.5mmである。逆刺を有していたと考えられるが、その基部のみ残存する。頭部は鎌身との接合部のみ残存し、その幅は6.5mmである。

M112は有頭式鉄鎌で、頭部から茎の一部が残存する。残存長は3.70cmである。頭部は2.60cm残存し、横断面は7mm×5.5mmの長方形をなしている。茎との境は棘闇となっており、その幅は9mmを測る。茎は1.10cm残存し、横断面は5mm×3.5mmの長方形をなしている。茎に木質の遺存は認められない。

M113は長頭式鉄鎌で、頭部の一部と茎を欠く。残存長は7.20cmである。鎌身は柳葉形をなし、全長1.30cmを測る。横断面は両丸造であるが鑄は認められない。中央部における厚さは4mmである。鎌身闇は角闇で、その幅は7.5mmである。頭部は5.90cm残存し、横断面は4.5mm×3.0mmの長方形をなしている。

M114は有頭式鉄鎌で、頭部から茎にかけて残存する。頭部は6.55cm残存し、横断面は6.5mm×4mmの長方形をなしている。茎との境は棘闇となっており、その幅は9mmを測る。茎は1.50cm残存し、横断面は4.5mm×3.5mmの長方形をなしている。

M115は頭部と考えられる。残存長は4.90cmである。断面は5.7mm×4.5mmの長方形である。下端部は茎との境をなし棘闇となっている。開幅は7.8mmである。茎はわずか4.7mmの残存である。

刀子 2点(M119・M120)出土している。

M119は刃部から茎にかけて残存する。残存長は4.70cmである。刃部は2.00cm残存し、幅は1.15cmを測る。背部幅は5.5mmである。茎との境は無闇で、その幅は1.25cmを測る。茎の残存長は2.70cmである。横断面は平造となっており、背部は認められない。

M120は茎である。茎を中心には存するが、先端を欠く。残存長は4.20cmである。刃部は4mm残存し、残存部の刃幅は1.15cmである。背部の幅は6.5mmである。茎との境は斜行する片闇となっている。闇部における幅は1.10cmである。茎は3.80cm残存し、横断面は7mm×3mmの長方形をなしている。

馬具 M122～M124の3点出土している。

M122は完存する鍔吊金具である。U字形をなす吊部とほぼ平行する脚部からなる。吊部と脚部を含めた全長は9.00cmである。吊部は幅8.5mm、厚さ6mmの断面長方形からなる。脚部は最大幅4.15cmを測り、先端部の5.2mmは内側へ屈曲し、同時に幅を減じている。脚部断面は幅1.70cm、厚さ2mmの板状をなしている。脚部左右に各2本鉄錆が打ち込まれており、各錆ともに完存している。その長さは1.90cm～2.10cm、径2.5mmである。錆頭の残存状況は良好ではなく、確認することはできない。各錆の間隔は2.50cmと2.20cmである。

M123は鉤形をなす絞具で、一端を欠く。断面は長方形をなす。断面の最大規模は6mm×8mmである。

M124は飾りの一部と考えられる。厚さ1mmの銅板が立体形をなし、一部が折れ重なっている（写真図版237）。周囲は幅2mmにわたり屈曲し、縁取りされている。表面には金箔の遺存が認められる。

他 M118は弧状をなす鉄製品で、両端とも欠け5.30cm残存する。断面は3mm×3.5mmの方形をなしている。当初から弧状をなしていたのか、何らかの影響で弧状となったのかについては明らかにし得ない。各所で剥離が認められる。鉄礎基の可能性も考えられる。M125は板状の鉄製品である。厚さ3.5mmの板からなり、一部立ち上がりが認められる。平面形は円形傾向にある。M126は、幅1.00cm～8.5mm・厚さ2.5～3mmの帶状をなす製品で、一端が屈曲している。屈曲部を境に長い側が5.65cm、短い側が1.60cmを測る。

玉類 碧玉製の丸玉が1点（J2）出土している。出土位置は、土器群2の南東側、M107出土地点の北西1.00mにあたる（第379図）。径1.40cmと大型の丸玉である。両面穿孔により孔が開けられている。

周辺出土遺物 南構1号墳周辺から出土した遺物で、出土位置を特定できなかったものがある。土器2点（2087・2088）と金属器1点（M108）が該当する。2087と2088の杯については杯aIIに分類される。墳丘付近から出土したもので、墳丘内の盛土中に混入していた可能性も考えられる。当墳との具体的な関係については明らかにし得ない。

土器 須恵器の杯と甕が出土している。杯は2087と2088の2点である。いずれも杯aIIに分類され、底部の2/3の範囲が回転ヘラ削りにより仕上げられている。甕は2089の1個体である。甕Dに分類され、口縁端部は玉縁状に折り返されている。体部外面は平行タタキの後カキ目により仕上げられている。体部内面には當て具痕が残存している。

金属製品 M108は完存する耳環で、全面が鍍金により金色を呈している（写真図版237）。外径は2.30cm×2.10cmを測り、1箇所2mmの開き部が認められる。横断面は7.7mm×5mmの楕円形をなしている。

6. 小 結

当墳は、横穴式石室を埋葬施設とする円墳であることが明らかとなった。石室は床面のみの残存であるが、その状況から2次におよぶ追葬が行われていたことが明らかとなった。床面上には副葬品は良好な状態では検出されなかつたが、石室内から搔き出されたと考えられる遺物が、当墳の南側で多く出土している。これらの遺物から当墳が築造され機能した時期は、古墳群4期2段階～3段階に位置付けられる（第7章第2節）。

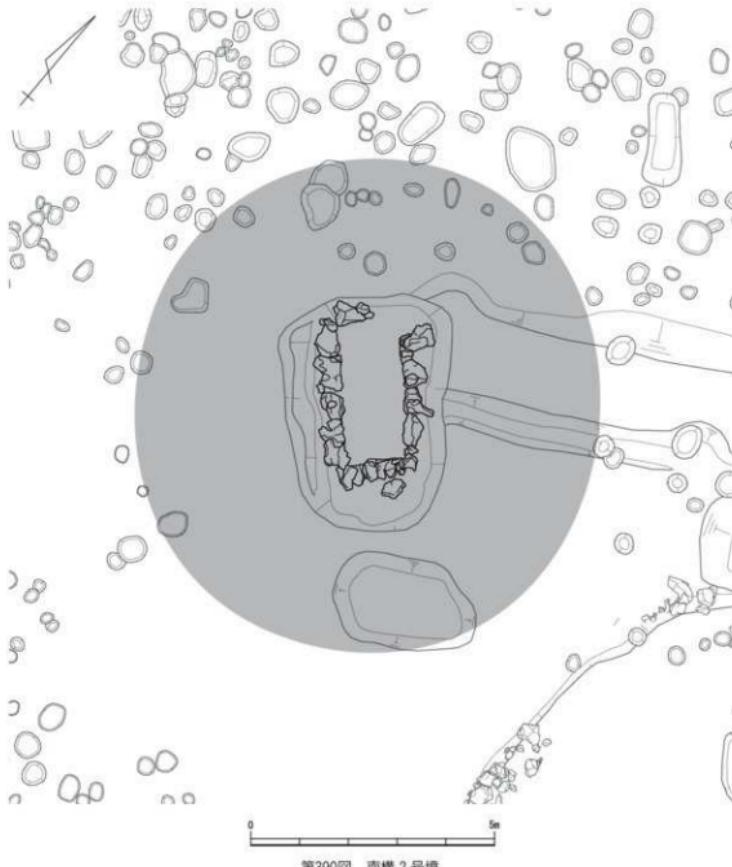
第3節 南構2号墳(図版97~100 写真図版245~270 附表92・93・105・109~111)

1. 検出状況

南構1号墳の北西側、同4号墳の東側に位置する(第353図)。石室はほぼ全体が検出されている。石室周囲の遺構の分布状況から、墳丘は主軸方向で9.50m、その直交方向で10.10mの円墳と復元される(第390図)。

2. 墓 墳

石室全体が検出面から掘り下げられ、平面形は隅丸長方形をなす(第392図)。主軸方向で4.84mを測る。その直交方向については北側ほど広くなる傾向が認められ、最大幅となる北半部で3.46mを測る。



第390図 南構2号墳

横断面は逆台形を基本とするが、部分的に箱形をなす箇所も認められる。西側から南側にかけては二段に掘られている。検出面からの深さは、南側が最も深く50cmを測り、逆に北側が最も浅く20cmである。全体的に底部は平坦で、墓壙中央部における底部の標高は29.90mである。

3. 石室

概要 4面を取り囲む石積からなる(第392図)。石材は全て墓壙底部に置かれており、設置のための穴・溝等は認められない。壁面は4面からなり、北西壁については北辺東側の一部を欠く。この箇所については入口の可能性が考えられるが、後述する遺物の出土状況(第396図)からは否定的である。石室は北西-南東方向に主軸をとり、その方位はN43° 00' Wを示している。

壁面に囲まれた床面の平面形は長方形をなし、その規模は主軸方向で3.20mを測る。その直交方向の規模は、北西辺で1.30m、南東辺で1.20mとわずかに北西側が広くなっている。南東辺と主軸規模を基準とした床面積は3.84m²である。

石室 4面を構成する石材は、全て玄武岩(溶岩)が使用されている。基底石を中心に残存するが、一部2段にわたり残存する箇所も認められる。基底石の底部はほぼ一定で、その標高は30.07mを測る。

北西壁 北西部の1石のみ残存し、その東側に控えと考えられる2石が認められた。高さ50cm、幅50cmの大型の石で、内側の面には加工痕が認められる。

北東壁 北端の1石分を除いては、基底石が完存する。中央部および北半で2段分残存する。石材は横積みされている。内面が面をなすように揃えられているが、石材の加工はほとんど認められない。石材間の隙間も顕著に認められる。南東端付近の石材が最大で、高さ55cm、最大幅70cmを測る。残存する石材底部からの高さは、最大で64cmである。

南東壁 基底石レベルでは完存する。一部を除き2段から3段積み上げられている。基底石について横積みされているが、2段目以上の石材は一部小口積みの傾向も認められる。石室内側の石材の加工は全く認められず、石材の凹凸が顕著に認められる(写真図版258)。石室側の面は、4面のなかで最も凹凸が顕著である。東側の基底石の規模は高さ28cmを測り、最大幅は75cmである。残存する石材底部からの高さは最大で50cmである。

南西壁 基底石レベルで完存し、各石材が横置きされている。石室内側の面は各石とも加工が認められ、他の面よりていねいに仕上げられている。ただし石材間の隙間は顕著である。石材の規模は、高さが32cm~38cmを測り、幅が62cm~75cmである。残存する石材底部からの高さは最大で48cmである。

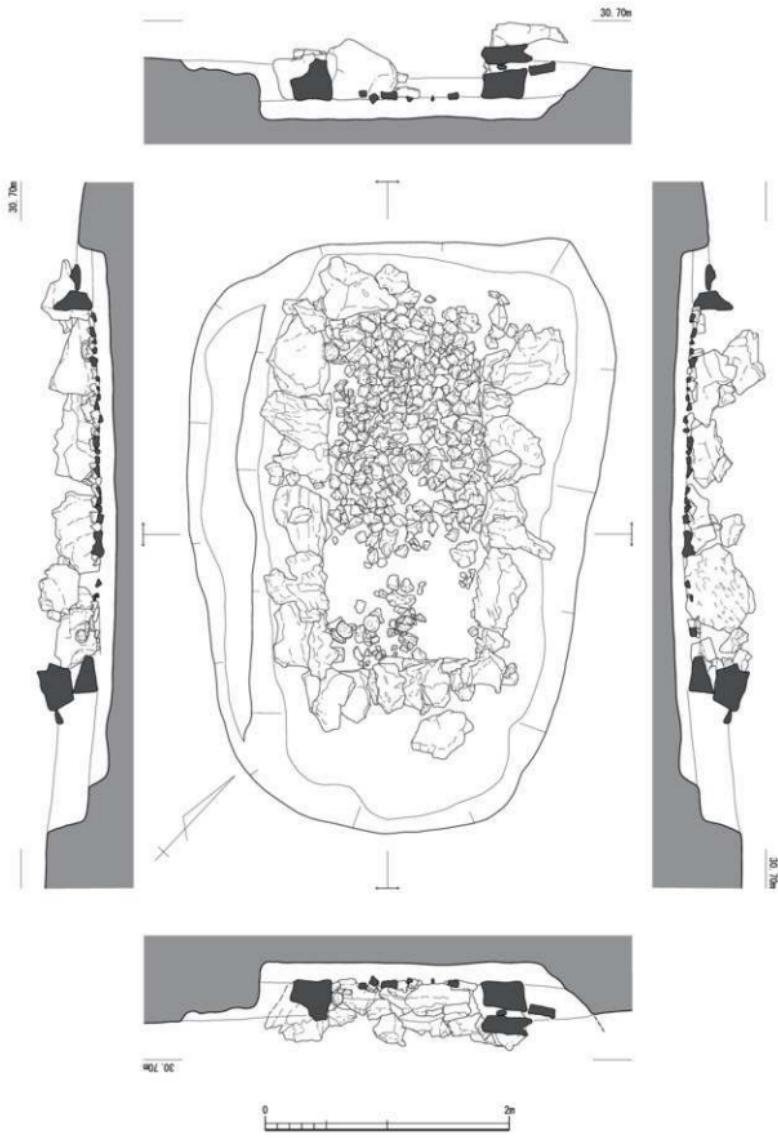
礎床 初葬面と追葬面の2面が認められた。追葬面は初葬時に副葬された土器(2090・2092・2093)の上に礎床が敷かれていた(写真図版254)。

初葬面 石室構築当初の床面である(第392図)。当初は全面に敷かれていたと考えられるが、南東半においては一部の残存にとどまる。10cm~15cm大の礎(溶岩)が敷き並べられ、その厚さは5cmないし6cmと一定している。ただし、北壁付近は15cm大~20cm大とやや大きめの礎が用いられている。上面のレベルはほぼ一定している。

追葬面 初葬面の上側に新たに礎(溶岩)が敷き並べられていた(第393図)。第393図では、両面の礎床

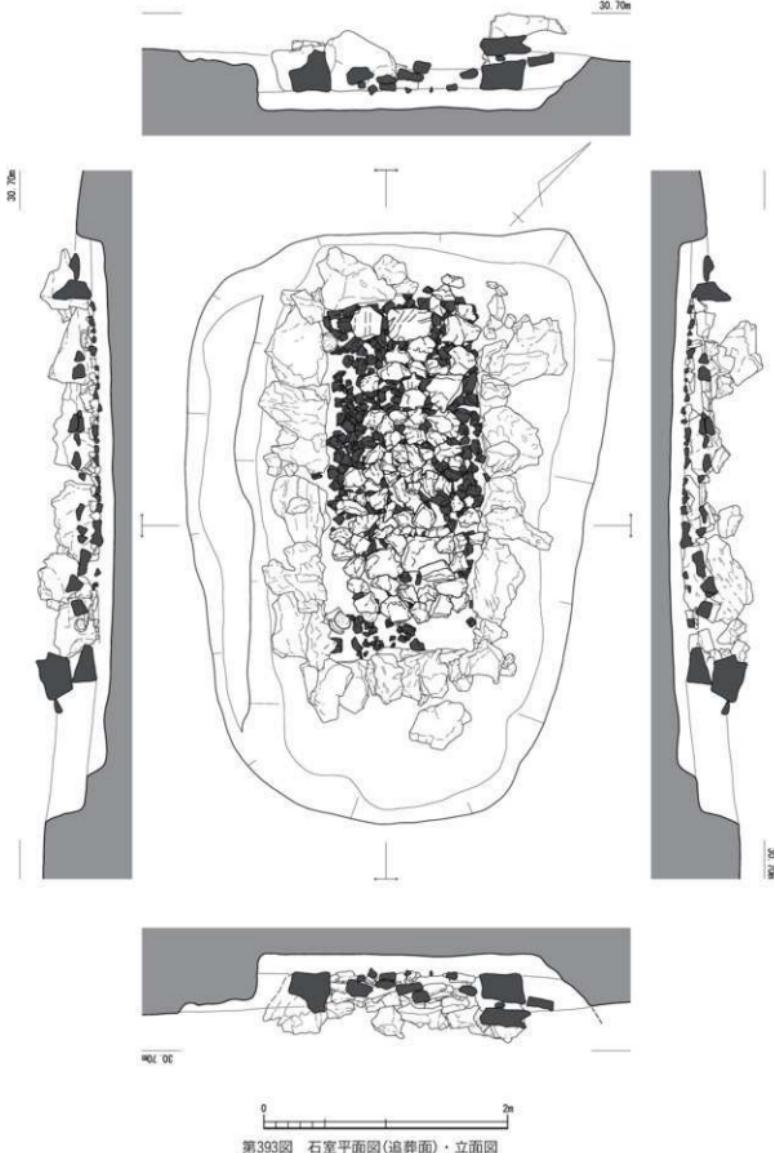


第391図 石材の取り上げ作業



第392図 石室平面図(初葬面)・立面図

間に空間が認められるが、初葬面の上側に追葬用の礫が散かれていた。初葬面と追葬面とは15cm～20cmの差が認められる。礫床に用いられた礫は15cm大～40cm大の溶岩で、20cm大が平均的な大きさである。



第393図 石室平面図(追葬面)・立面図

北西壁部付近と南東壁付近に大型の礫が集中する傾向が認められる。初葬時より明らかに大型である。
また初葬時と比べて並べ方が雑で、その面も整えられていない。

4. 出土遺物(図版97~100 写真図版261~270 附表92・93・105・109~111)

大きく初葬時と追葬時の副葬品に分類できる。さらに、石室掘方内から数点の土師器が出土している。掘り方内から出土した土器については墳丘構築時の混入と考えられ、当墳とは直接的な関係はないものと考えられる。

初葬時副葬品 土器と金属製品が出土している(第395図)。いずれも磯床直上から出土している。

土器は須恵器に限られ、石室南西隅付近で4点(2090~2093)がまとまって、2094が石室西隅付近から出土している。この出土状態から判断して、2090と2091、2092と2093がそれぞれセットで副葬されていたものと考えられる。

金属製品については、鉄鏃が1点(M127)石室中央南西壁付近から出土している。

土器 須恵器の杯蓋と杯が出土している。

杯蓋 2090と2092の2個体が出土している。2090は杯蓋nに、2092は杯蓋jに分類される。また2090の天井部外面にはX字状のヘラ記号が認められる(写真図版261)。

杯 2091・2093・2094の3個体が出土している。2091は杯j1に、2093は杯C4に、2094は杯C3に分類される。特に2094は、底部の2/3において回転ヘラ削りが施されている。2091の底部はヘラ切り後未調整である。両個体ともX字状のヘラ記号が認められる。一方2093は口縁部の立ち上がりが短く、底部の1/2が回転ヘラ削りにより仕上げられている。

金属製品 M127の1点が出土している。M127は有頭式の鉄鏃で完存する。全長11.95cmを測る。錐身は逆刺をもつ柳葉形をなし、全長5.20cmを測る。横断面は平造で、中央部における幅は2.20cmを測る。中央部における厚さは3.5mmである。逆刺はわずかで、その長さは3mmである。頭部は2.50cmを測り、横断面は8mm×3mmの長方形をなしている。茎との境は台形闊をなし、その幅は1.10cmである。茎は4.50cmを測り、その横断面は3.5mm×2.5mmの長方形をなしている。一部木質の付着が認められる。

追葬時副葬品 土器・金属製品・玉類が出土している(第396図)。いずれも追葬面直上から出土している。ただしこれらの副葬品は、その出土状態から追葬時の状態がそのまま保たれているものではなく、ある程度の移動等があったものと考えられる。

土器は須恵器に限られ、石室の北西側と南東側に集中する傾向が認められる。北西側では、2100と2102が奥壁に沿って、2103が北隅に、2097と2101が南東壁に沿って出土している。2097と2101については、当初はセットで副葬されていたものと考えられる。南東側では、2098・2106・2104・2105・2108・2109・2112が石室南隅を中心にまとまって出土している。2104~2106と2108・2109・2112の各3個体は特にまとめて出土している。さらに、2099・2096・2107・2110・2111の5個体が南西隅や北側でまとまって出土している。そして2095が石室のほぼ中央部から単独で出土している。

土器 須恵器のみが出土している。器種としては杯蓋・杯・高杯蓋・高杯が出土している。

杯蓋 2095~2099の5個体である。2095は杯蓋Pに、2096は杯蓋gに、2097は杯蓋fに、2098は杯蓋eに、2099は杯蓋jに分類される。2097の天井部外面には当て具痕が認められる(第394図)。

杯 2100~2103の4個体である。2100は杯e2、2101は杯j3に、2102は杯C8に、2103は杯j1に分類される。

2101の底部は回転ヘラ切り後未調整であるが、体部下半には補助



第394図 2097内面當て具痕

ケズリが認められる。2103の口縁部内面には強い回転ナデによる段が認められる。

高杯蓋 2104～2106の3個体である。いずれも杯蓋に鉢状のつまみが付くタイプで、形態的な差は認められない。つまみの中央部がわずかに突出する2105と2106と、突出しない2104とに差が認められる。天井部の約1/2の範囲については回転ヘラ削りにより仕上げられている。

高杯 2107～2112の6個体である。いずれも有蓋高杯Ccに分類される。脚部高は6cm未満である。杯部は6個体とも口縁部の立ち上がりがわずかで、差は認められない。2107～2110については、杯部下半外面が回転ヘラ削りにより仕上げられている。

脚部は全て脚Cに分類され(第549図)、内外面が回転ナデにより仕上げられている。脚端部の仕上げにおいて、下端部が下方に折り返されるcタイプ(2108・2109・2110)と、上下両端部を上下方向に拡張させるdタイプ(2107・2111・2112)が認められる。この他2110と2112の重みが顕著である。

金属製品 耳環・刀子・鉄鎌が出土している。石室北西半部を中心に、散在した状態で出土している。原位置は保たれていないものと考えられる。耳環のM128は石室中央部東壁付近から1点出土している。

耳環 耳環はM128とM129の2点が出土している。2点とも完存する個体で、鍍金は遺存していない。M128は外径が2.75cm×2.60cmを測る。幅1mmの開き部を有し、横断面は5mm×4.5mmの円形をなしている。M129は外径が2.80cm×2.60cmを測る。幅1mmの開き部を有し、横断面は径5.5mm×4mmの円形をなしている。

刀子 M130～M132の3点出土している。

M130は完存し、全長13.20cmを測る。刃部は7.85cmを測り、関部での刃幅は1.50cmを測る。背部の幅は5mmである。茎との境は不均等な両側をなし、背側が斜角、刃側が直角をなしている。茎は5.35cmを測り、断面は7mm×3.5mmの長方形をなしている。地金の外側には木質が認められ、さらにその外側には鹿角の遺存が認められる(写真図版266)。

M131は茎である。関部側を欠き、残存長5.90cmを測る。厚さは1.5mmである。

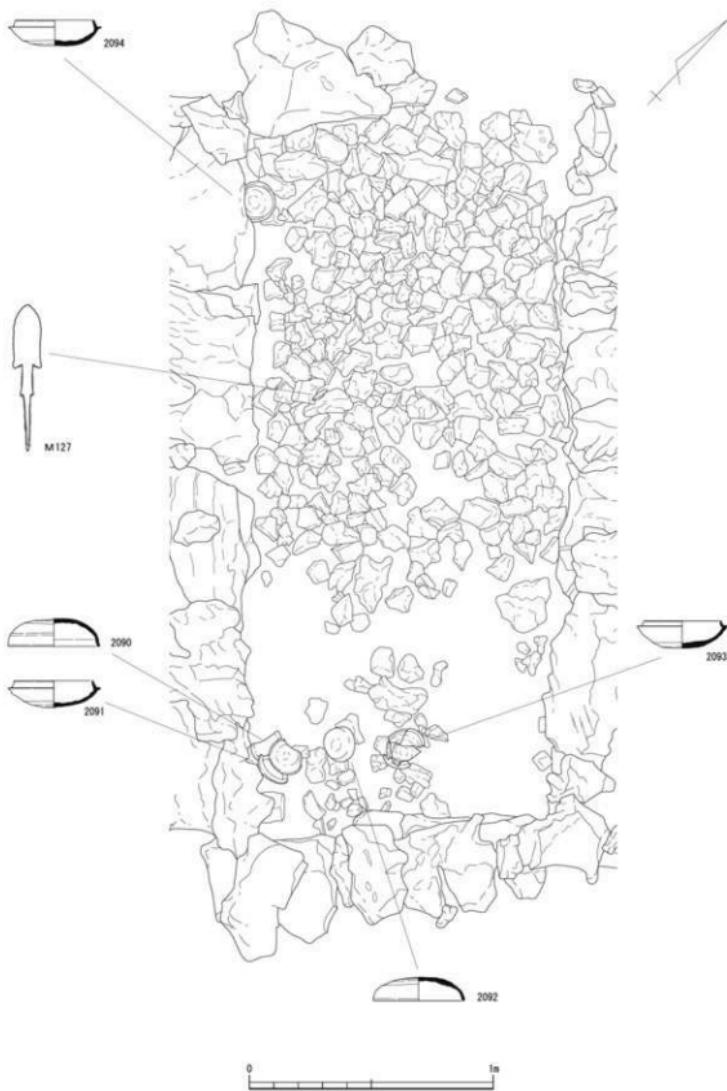
M132は刃部から茎の一部が残存し、残存長は5.25cmである。刃部は5.00cm残存し、最大幅は1.25cmである。背幅は3mmである。茎との境は斜行する片側で、その幅は8mmである。茎は2.5mm残存し、その幅は4mmである。

鉄鎌 M133～M139の7点出土している。

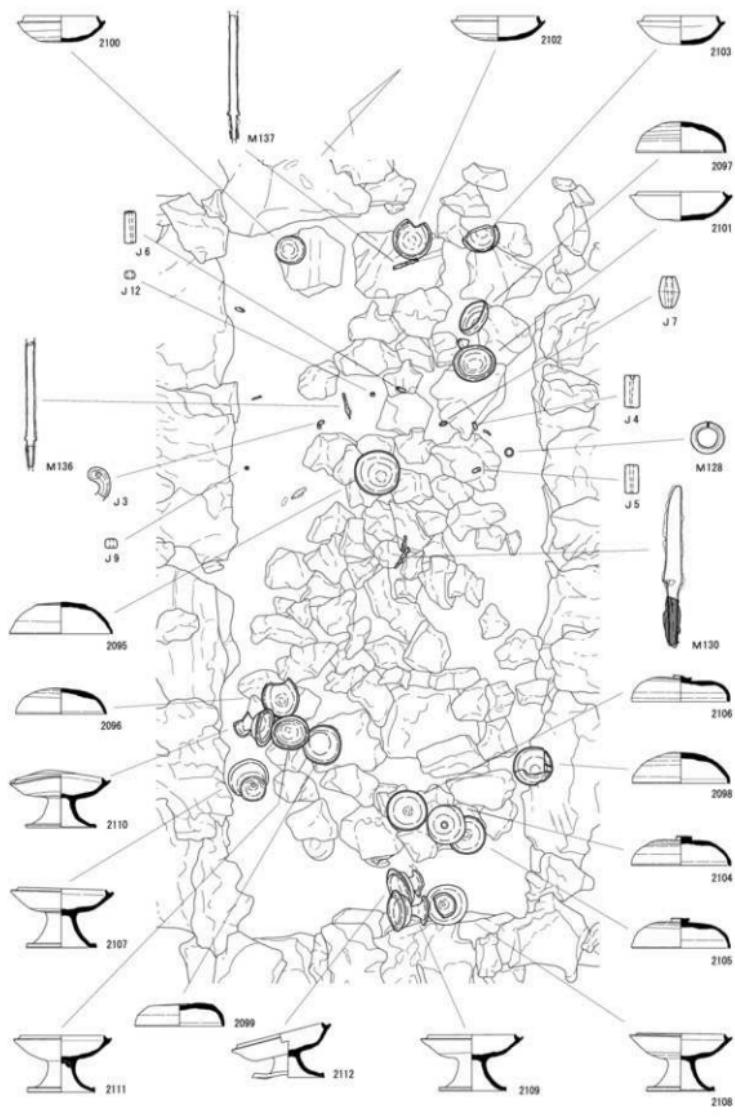
M133は短頭式鉄鎌である。茎の大半を欠き、残存長は8.60cmである。鎌身は逆刺を有する柳葉形であるが、逆刺は両側とも基部のみの残存である。鎌身長は4.40cmを測り、最大幅は3.05cmである。横断面は平造で、中央部における厚さは4mmである。頭部は4.00cmを測り、横断面は7.5mm×4mmの長方形をなしている。茎との境は台形闊で、その幅は8mmを測る。茎は4mm存存し、その断面は5.5mm×3.5mmである。

M134は短頭式の鉄鎌である。頭部に逆刺を有する点が特徴的である。茎の先端部を欠き、残存長は7.2cmである。鎌身は逆刺を有する柳葉形をなし、全長は3.10cmである。逆刺はその基部のみで、大半を欠いている。鎌身の最大幅は2.80cmである。横断面は平造で、中央部における厚さは2.5mmである。頭部は3.55cmを測り、片側に逆刺を有する。逆刺の長さは1.05cmである。頭部の横断面は5.5mm×3.5mmの長方形をなしている。茎との境は棘闊で、その幅は7.5mmを測る。茎は1.00cm残存し、横断面は4mm×2.5mmの長方形である。

M135は鎌身から茎にかけて残存する有頭式鉄鎌で、鎌身の先端と茎の先端を欠く。残存長は8.65cm



第395図 初葬面遺物出土位置



第396図 追葬面遺物出土位置

である。錐身は逆刺を有する柳葉形と考えられ、残存長は4.95cmである。中央部における幅は2.20cmを測り、断面は平造である。厚さは4mmである。逆刺は完存せず、良好に残存する方の残存長は7mmである。頭部は3.25cmを測り、横断面は6.5mm×4mmの長方形をなしている。茎との境は台形闊をなし、その幅は1.00cmである。茎は1.15cm残存し、横断面は5mm×4.5mmとほぼ方形をなしている。

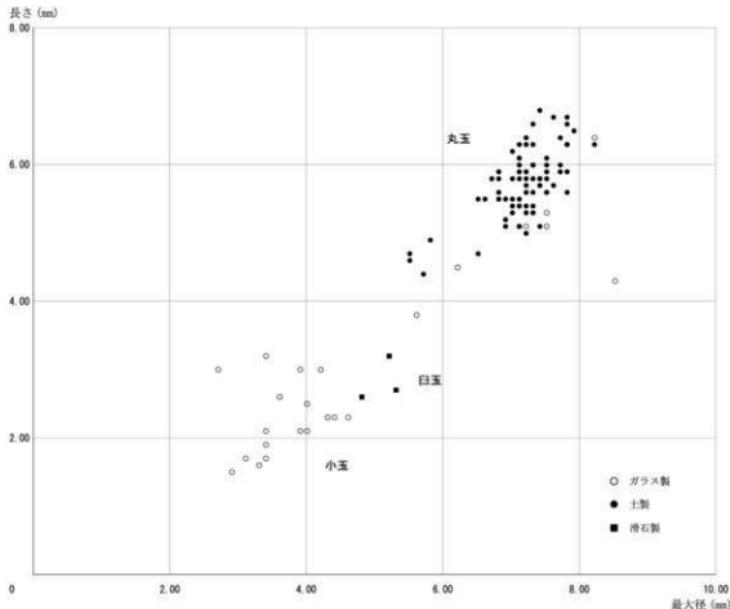
M136は頭部から茎にかけて残存し、残存長は10.30cmである。頭部は8.10cm残存し、横断面は5mm×4mmの長方形をなしている。茎との境は棘闊をなし、その幅は9.5mmである。茎は2.20cm残存し、横断面は4.5mm×3mmの長方形をなしている。全面に木質の遺存が認められる。

M137は頭部から茎にかけて残存する。錐身は残存せず、残存長は10.20cmを測る。頭部は8.20cm残存し、横断面は5.5mm×3mmの長方形である。茎との境は棘闊をなし、その幅は9.5mmを測る。茎は2.00cm残存し、横断面は4mm×3mmの長方形をなしている。

M138とM139は茎の先端部である。M138は2.50cm残存する。横断面は2mm×2.5mmのほぼ円形をなしている。全面に木質の遺存が認められる。M139は残存長1.55cmを測る。横断面は3.5mm×2.5mmの長方形をなしている。表面に木質と糸巻き痕が認められる。

玉類 勾玉・管玉・切子玉・小玉・丸玉・白玉が出土している。玉類は、金属製品同様、石室中央部や北側に散在する形で出土している(第396図)。このため原位置は保たれていないものと考えられる。

勾玉 J3の1点が出土している。瑪瑙製で尾部を欠く。頭部の穿孔は片面穿孔である。割れ円錐は認められない。残存長は2.07cmである。全体的に平板な形状をなし、側面と背部・抉り部、頭部と抉



第397図 南構2号墳出土九玉の規模

り部の境は研磨痕が残存している。特に抉り部の研磨には粗雑さが認められる。

管玉 J4～J6の3点が出土している。碧玉製の管玉で、孔は片面穿孔により開けられている。3点とも長さ・径が異なるものである。J4の終孔部には径5mmの割れ円錐が認められ、研磨仕上げされている。J5の両端面は磨き残しが認められ、研磨が不十分である。

切子玉 J7とJ8の2点が出土している。2点とも完存する水晶製の切子玉である。六角錐台を底面であわせた形状をなし、孔は片面穿孔により開けられている。2点とも終孔面には割れ円錐が認められる。

小玉 J16～J32の17点で、全てガラス製である。青緑色を基本としている。J21・J29・J31・J110はソーダ石灰ガラス製との分析結果が得られている(第5章第4節)。

丸玉 J9～J15・J36～J110でガラス製と土製(土玉)からなる。

ガラス製丸玉は8点(J9～J15・J110)出土している。なおJ110については小片のため図化できなかつた。最大規模のものはJ9で、最大径8×8.2mm、長さ6.4mmを測る。色調は褐色を基本としている。このなかで、J9・J15・J110はソーダ石灰ガラス製、J12はカリガラス製との分析結果が得られている(第5章第4節)。

土玉はJ36～J109の74点である。J37が最大で、最大径7.5×7.8mm、長さ6.7mmを測る。小型のものはJ109で、最大径が5.3×5.7mm、長さが4.4mmである。ガラス製丸玉の大型の一組とはほぼ同規模であるが、ガラス製と比較してその規模がほぼ均一である点が特徴的である(第397図)。

臼玉 滑石製の臼玉が3点(J33～J35)出土している。3点については小玉に近い規模である(第397図)。

他 水晶製の小片が2点(J111・J112)出土している。小片のため図化できず、形態も不明である。

掘方内出土土器 土師器が4点(2113～2116)出土している。2114は高坏である。2115と2113についてもその形態が2114と類似することから高坏として報告する。2116については、椀もしくは鉢の可能性も考えられる。

2114は坏部のみ残存する。坏部下半外面をナデの後、内外面を横ナデにより仕上げ、最後に内面に放射状の暗文が施されている。暗文は、坏底部における切り合ひ関係から右側から左側の順に施されている。脚部との接合部外面は縱方向のハケにより仕上げられている。

2115は内外面とも横ナデにより仕上げられ、口縁部を外側に外反させている。最後に内面に放射状の暗文が施されている。2114と比べてその間隔は広くなっている。2113も形態的・技法的特徴は2115と同じであるが、坏部内面は横ナデの前にハケが施されている。暗文の間隔は2115より密である。

2116は、体部下半外面がナデ、他は内外面とも横ナデにより仕上げられている。口縁端部は強くつまむような横ナデにより極端に薄く仕上げられ、体部との境は内外面とも段が形成されている。内面には放射状の暗文が施されている。

5. 小 結

時 期 初葬時の土器と追葬時の土器を峻別することは困難であるが、これらの土器から古墳群4期1段階に位置付けられる(第7章第2節)。

堅穴系横口式石室 墓壙が掘られその底部に基底石が置かれていること、基底石の並びから基底石レベルでは入口が認められないことから、堅穴系横口式石室と考えられる。頭位については石室平面図のみから頭位を明らかにすることは困難である。追葬時の玉類の分布状況から、北西側に頭位があったものと考えられる。